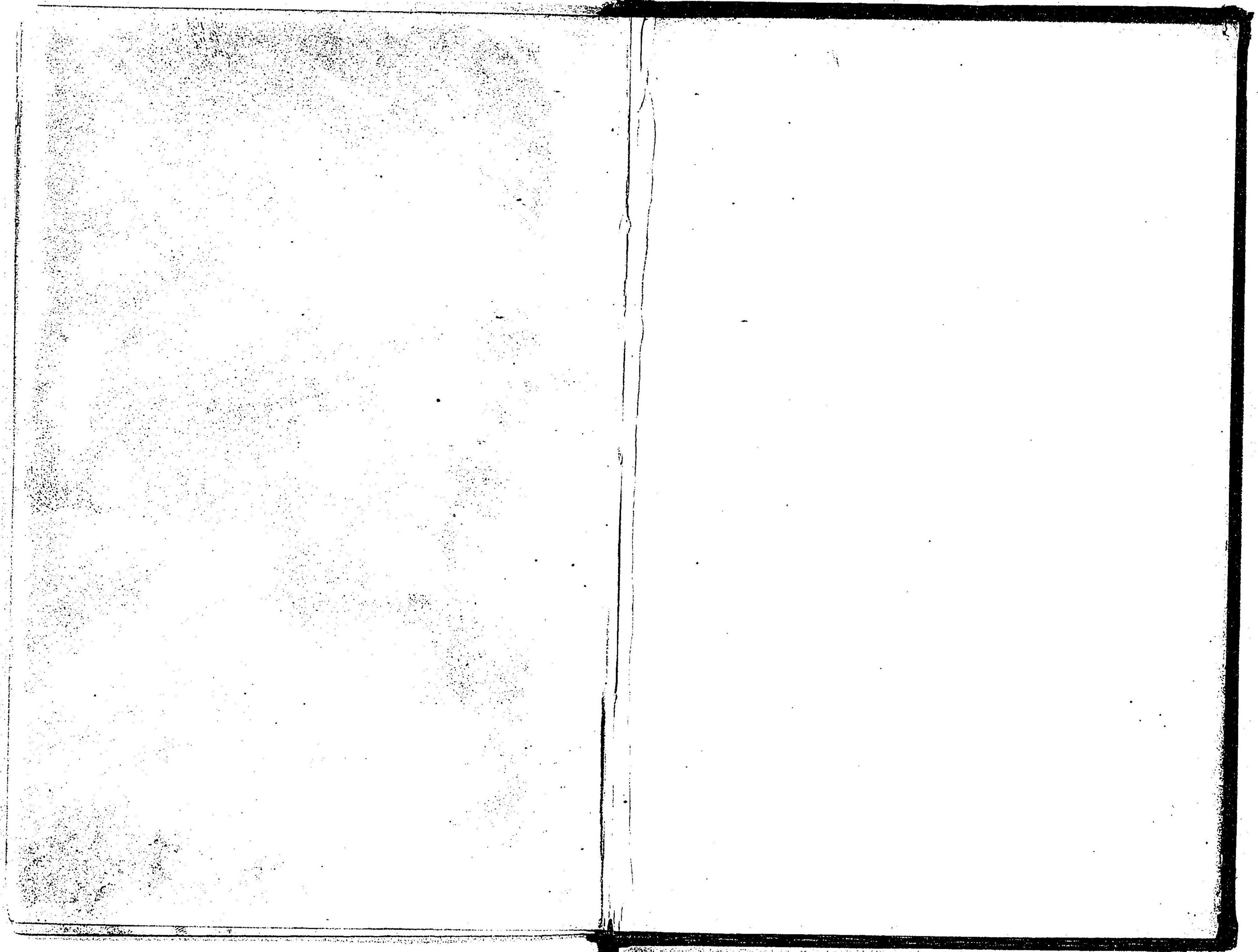


74
416

卷之二





評林
葉平全集

明治
40 6 21
丙午

評釋業平全集序

飯田季治ぬしは故武郷翁の季子にしてよく家學をつがれさきに乃翁の日本書紀通釋を發行せられ又その家集蓬室集をも世に公にせられその孝志いまのわかうどの中にはいと稀に見る所なりまた歌のこゝとにつきてはとし頃おのれにいひあはされけるがこのほど評釋業平朝臣全集をたづさへられこれがはしに言くはへよとあるにひとわり見もて行けばあまたの書どもを考へあはせられていとつばらにものせられたる世のためにもいとよきものになんありけるぬしのなべのわかうどにことなり情に厚く誠の筋にこゝろざゝれけるはそのかみの人みな藤原氏の鼻息をのみうかいふ世にありて朝臣のひとり秀でられたるにもいとよく似たりさればかゝるかたに先づ心をかたふけてひそかにおのが志をもこの中によりて洩らされたるならし考

證などのくはしきは更なり歌の解釋もおのづからさる心より朝臣の
心をもおしはかられたるまことに今の世にしては雨夜の星ともいひ
つべしおのれは何の學びもなくかゝることにはいとよきさがなれ
どぬしの志に感じかつ年ごろのちなみもあればいなみがたくていと
おほけなけれどひと言かくなん

たちまよふ霞は晴れてさやかにも

はるやむかしの月のかげ見ゆ

梅園のあるじ

小出 榮しるす

評釋業平全集目次

序論.....一—三八

在原業平朝臣.....一

朝臣と才學.....三

朝臣と惟喬親王.....五

朝臣と藤原氏.....六

朝臣の東下.....一六

在中將系圖.....二〇

在中將年譜.....二一

朝臣の歌と伊勢物語.....二四

本書と業平朝臣集及び同拾遺集.....二九

朝臣の歌.....三三

業平朝臣集評釋.....三九—一八二

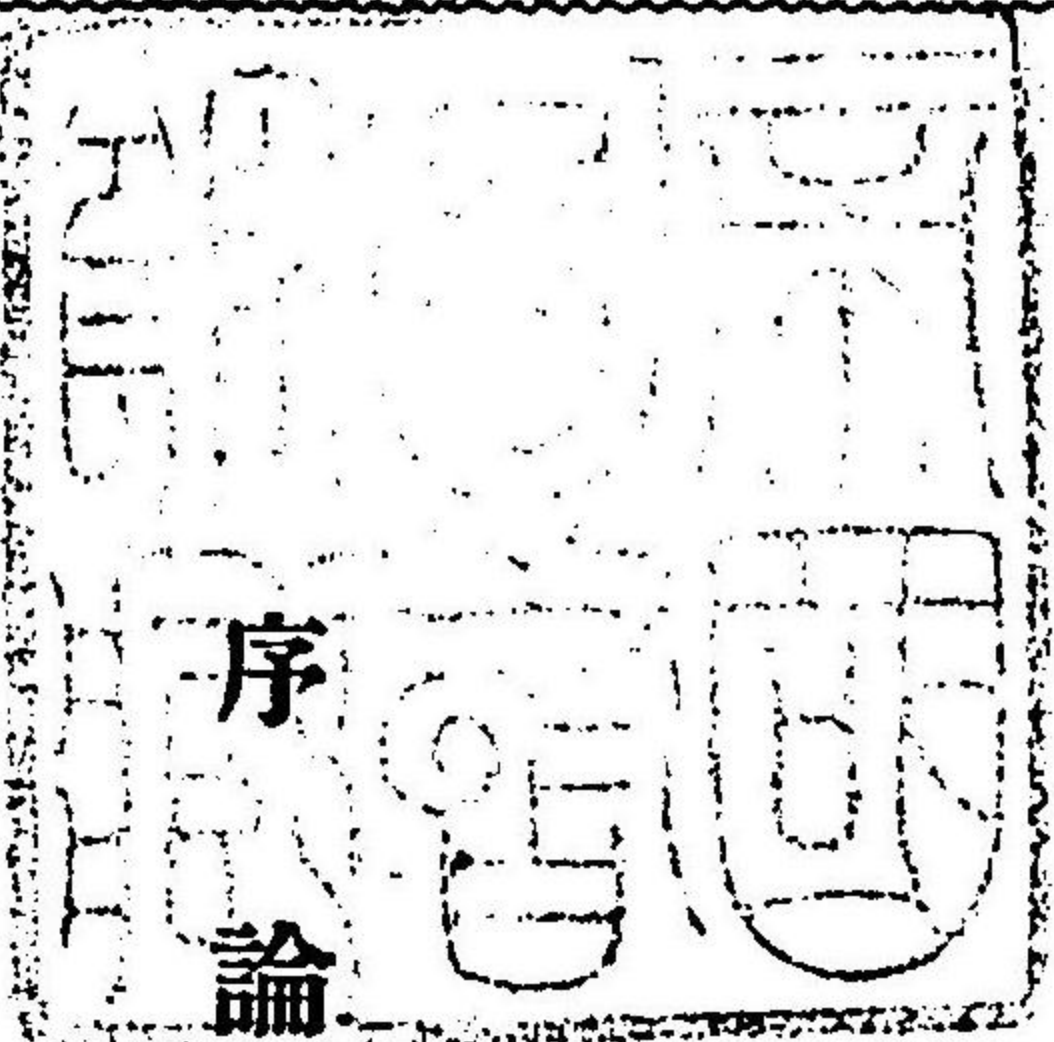
業平朝臣集拾遺評釋.....一八三—二五七

賀茂の岩本橋本は。業平。實方なり。人の常に云ひまがひ侍れば一年参りたりしに。老たる宮司の過しを呼びとめ尋ねて侍りしに。實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば。橋本やなほ水の返ければと覺へ侍る吉水和尚『月を愛で花をながめし古へのやさしき人は此處にありはら。』と詠み給ひけるは。岩本の社とこそ承りおき侍れど。おのれらよりはなかなか御存知などもこそさぶらはめと。いとうやうやしく云ひたりしに。そいみじくおぼえし。

（つれづれ草）

評釋業平全集

飯田季治著



在原業平朝臣

在原業平朝臣は、平城天皇第三の御子。阿保親王の第五子にして、御母は桓武天皇の皇女、伊登内親王と申しき。即ち桓武平城二帝の

皇孫なり。天長三年父親王表を奉りて曰く。無品高岳親王(平城帝第一皇子)の男女には、先きに王號を停めて朝臣の姓を給ひぬるに。臣が子息は未だ改姓に預らず。既に昆弟の子たり。寧ぞ齒列の差を異にすべきと。是に於て其兄君。仲平。行平。守平等の王と共に。姓を在原朝臣と賜ひぬ。夫よりして人臣の列に降り。承和十四年春正月藏人に補せられ。嘉祥二年從五位下に叙せられ。貞觀四年從五位上に昇り。五年左兵衛督となり。六年左近衛少將に任せられ。七年右馬頭を拜し。十一年正五位に叙せられ。十五年從四位下に進み。元慶元年右近衛中將となり。尋で從四位上に叙せられ。二年相模權守を兼ね。三年藏人頭に任せられ。四年正月美濃權守を兼ね。同年五月二十八日五十六歳にして薨じぬ。辭世の歌に曰く「遂にゆく道とは豫て聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」と。その在原氏にして五男なりしより。人呼んで在五中將と稱へ。略して又在中將といふ。

長子を棟梁(棟梁は棟梁之臣の名義にして。棟と梁と也。古來是をむねやなと訓むは甚だ其謂れなしと呼び。次子を滋春と名づく。共に國歌に巧みにして。勅撰の集にも其詠數多出でたり。孫元方また斯道に秀絶の聞え高く「年の内に春は來にけり一と歳を去年とやいはむ今年とやいはむ」の一首は。古今集の巻頭に飾られて。女童部も皆よく之を知れり。世に物の上手の二代に亘れるは罕なりとする處なるを。斯くばかり國歌の道に妙なる人の。つぎつぎに世に出でられたるは。珍らしくも亦榮譽ある一家と謂ふべし。

朝臣と才學

三代實錄卷第卅七。元慶四年五月二十八日の記事に云。從四位上行右近衛權中將兼美濃權守。在原朝臣業平卒云々。業平體貌閑麗。放縱不拘。略無才學。善作和歌。とあり。されど此の略無才學の無

字は有字の誤ならむと眞淵翁は云へり。實に語勢の上よりするも、略無才學とは言はるべき事にあらず。且つ同書貞觀十四年五月の記事に、十七日丙戌、勅遣正五位下行右馬頭在原業平、向鴻臚館勞問渤海客、是日賜客徒時服とあるに因るも、才學無き者を故らに撰びて、外交の大事を掌どらしむるの謂あるべくもあらねば、是は必ず有字の誤にして、實は略才學ありとなるべし。本居翁が説に朝臣は藤原氏に甚だ忌れたる状態れば、或は後に有の字を无の字に換へられし様の事ありしも量り難しと、これ或は然らむ歟。また蓬室翁雜錄に云、三代實錄に、業平體貌閑麗、放縱不拘、略有才學、善作和歌、有字諸本無に作れども、大永四年五月二十五日の奥書ある卜部兼夏宿禰の寫されたる卷の抄本の校字に有に作れりとあり。是ぞ尤も正本とはすべからむ。想ふに藤氏の撰べる史に、朝臣の履歷を叙して才學の上に速べるを見れば、其いといしく蔑り難きものありけむは

推て知るべし。あはれ其才其學を以て、藤原氏に阿諛したらむには、高位顯官も得て望むべかりしならむを、潔く雄々しき心に之を快しとせず。かへりて藤氏の專横を憤り、惟喬親王派の首領となりて相争ひしが爲め、遂に藤氏一統の嫌忌する所となり。はては後の世までも悪しざまにわだなる名のみ傳へらるゝに至りしならむ。

朝臣と惟喬親王

惟喬親王(惟喬或作惟高)は、文徳天皇第一の御子にして、御母は正四位下左京大夫紀名虎の第二女、更衣紀靜子なり。帝深く親王を寵愛し給ひ、東宮に立てむと思し給ひけれど、第四の御子惟仁親王(御母は良房の女明子)の外祖父藤原良房を憚り給ひて果さず、事遂に止みぬ。天安元年いまだ冠せざるに特に帶劔を聽され、四品を授けられ給ひ、二年太宰帥と爲り、貞觀五年彈正尹と爲り、六年常陸太守

と爲り。十四年上野太守に遷り給ひしが、同年七月十一日、疾に寝ね頼に家出して御髪をおろし。法名を算延と稱へて小野の山里に遁れ給ひぬ。されば世に小野宮の稱あり(又稱水無瀬宮。或木原親王)寛平九年二月御年五十四歳にて薨じましぬ。業平朝臣此の親王に深く心を寄せ奉り。いかで帝位に即かせ奉りて。藤氏専横の世を掃き清めむと思ひ構へられし迹あるは、集中に其心を詠める歌あるに依りて明かなり。こゝに紀氏系圖を按ずるに。親王の御母静子の更衣の兄君。紀の有常に二人の女あり。次女は敏行朝臣の室。長女は業平朝臣の配たり。さらぬだに勤王の志深き朝臣の。斯く淺からぬ御由縁にさへまつはりたれば。此の親王の御爲に心血を瀝ぎて盡されたりけむは。また推量るに難からざるべし。

朝臣と藤原氏

業平朝臣は、いたく藤氏に忌憚せられしが如き迹あるは、普く史家の言ふ所なれど。正史記録は是を傳へず。たゞ其體貌の麗はしかりしと。渤海の使客に接せしと(三代實錄)二條の后に通はれしと(大鏡)宇多天皇の未だ殿上人にておはしける時。殿上の御倚子の前に相撲ひて天皇を投げ倒し。高欄を打折られしが。其折目世々に膳はず。折れ乍らに殘し傳へしといふ事(大鏡)續世績。辨内侍日記(其他二三の逸事を見るのみ。されば今にしては亮かに其事を知るべからねど。是を集中の歌に索めて。當時の史にあはせ按ふに。朝臣は仁明天皇の承和の末に至る迄は。何事もあらで年月を送り給ひしが如く。從て藤氏に忌憚せらるゝが如き緯もあらざりけらし。是は朝臣が廿三四歳のほど也。是より先き彼の承和の變ありて。仁明天皇その皇太子恒貞親王を廢し。道康親王(文德帝)を撰びて是に換へさせ給ひしが。親王立太子(承和九年八月)の後二年にして。第一の御子惟喬親王は生

れ給へり。されば文徳の御門。御位に即かせ給はん曉はしも。此の親王の皇太子に立たせ給はんは。素より論を俟つべきにあらねば。紀氏の歡びは言ふも更なり。藤氏専横の世を憤れる人々はしも。竊かに此の御子の御行末幸多かれと禱りぬ。朝臣は寔に其一人にてありし也。此の後三年(承和十四年)にして第二の御子惟條親王生れ給ひぬ。是亦紀の靜子の産む所なり。後また三年(嘉祥三年)文徳帝即位に先だつ事數月にして。第三の御子惟彦親王生れ給ふ。滋野朝臣貞主の女の産む所也。あはれ藤氏にしては。冬嗣の女古子。良房の女明子。良相の女多加幾子。藤原年子是子等ありと雖も。未だ一人の御子をだに擧げ奉らず。此の秋に於ける藤氏の顔色なかりしや思ふべし。斯くて嘉祥三年春三月。仁明天皇崩じ給ひて。文徳の帝御即位あり。いよ、惟喬親王こそ皇太子には立たせ給ふべけれど。朝臣も紀氏も憑めたりしを。御即位より五日に方りて藤原良房(文徳帝の御母仁明

皇后の兄君)の女明子。第四の御子惟仁親王を産み奉れるに。良房竊かに權威を振ひて。遂に此の御子を皇太子に据え奉りぬ。即ち天皇御即位の年の十一月。御子生れ給ひて纔かに九個月なりき。是より先き。藤氏は惟仁親王を。紀氏は惟喬親王を。互に太子に据え奉らむとして。争ふところありしが如し。されば此の時業平朝臣は。紀の有常等と共に黨して。甚く良房等に抗したりけむ。これその藤氏に嫌忌せらるゝ。そもくの始めなるべし。文徳の帝良房に憚り給ひて。いと寵愛し給ふ第一の御子を二の町となし。惟仁親王を立て、世嗣の御子と定め給ひしよりして。愈惟喬の御子を憐み給ふ事限りなく。惶くも常に叡慮安からずおはせしがごとし。されば一と年左大臣源信朝臣を召して。四方山の御物語の末。皇太子惟仁親王の未だ幼冲なるが故をもて。その長となり給はむ日まで。惟喬の御子に帝位を踐ませむの御志をほのめかし給ひ

ぬ。御さが優柔に過ぎ給へる帝にして是事あるは、或は業平朝臣等の竊かに献策する所ありしに因る歟。時は齊衡の末年なるべし。此の事大鏡裏書に見えたり。其文に云、承平元年九月四日夕、参議實頼朝臣來也。談及古事、陳云、文德天皇最愛惟喬親王、干時太子幼冲、帝欲先暫立惟喬親王、而太子長壯時、還繼洪基。其時先太政大臣(藤原良房)作太子祖父爲朝重臣、帝憚未發、太政大臣憂之、欲之使太子辭讓。是時藤原三仁善天文、諫大臣曰、懸象無變、事必不遂焉。爰帝召信大臣清談良久、乃命以立惟喬親王之趣。信大臣奏曰、太子若有罪須廢黜更不還立、若無罪亦不可立他人。臣不敢奉詔、帝甚不悅、事遂無變。無幾帝崩、太子續位、云々(大日本史卷九十一惟喬親王傳にも之れを録せり)是の文に據れば、始め良房、帝の御心を惶みて之を容れ奉らむとせしが、藤三仁の諛言に依りて心忽ち一變し、再び異議を挿挟み奉りしが如し。是に於てか又紀藤兩氏の間、争ひは起

りぬ。新井君美は其讀史餘論に、當時の状況を論じて曰く、江談云、帝有讓位於惟喬之志、憚良房不果、或祈神、又修秘法、眞濟爲惟喬祈焉。眞雅爲惟仁祈焉。按ずるに此の事亦國史に見ゆ。但し信源、信は帝の叔父也、諫め止めし也。齊衡三年十一月帝新に殿を造り、庭上にて親ら天を祭る事あり。これ江談所謂祈神の事歟。天安元年二月右大臣良房爲太政大臣、(大友、高市、押勝、道鏡以後初度なり)帶劔を聽さる。これ源信が諫に依て、良房の心を慰めむ爲め歟。其十一月弘法に贈大僧正、これ其弟子眞濟が請に依るといふ。按ふに眞濟をして惟喬が事を祈らるゝが故歟。其十二月惟喬元服、授四品、明二年八月天皇崩卅二歳也(惟喬十五歳)惟仁九歳にて踐祚、外祖良房攝政す(實録を按ずるに、帝倉卒有不豫之事、言語不通云々、又良房攝政たるべき遺詔の事も見え)云々と。また後世の史家は傳へて曰く、此の時惟喬親王の外祖父紀名虎固く執りて聽かず、良房また一步をも讓

らざれば、廟議更に決すべくもあらず。依て天意の勝負を試み。是を以て帝位を定めらるべしとて、八幡に臨時の祭を擧げて十番の競馬あり。此の時兩家に御祈の僧ありて、惟喬親王家の御祈には、柿本、紀僧正眞濟とて東寺一の長者弘法大師の高弟是を承り、東寺に檀を構へて降三世の法を行ひ、惟仁親王家の御祈には、外祖忠仁公の持僧比叡山の慧亮和尚是に任り、西塔寶幢院に檀を造りて大威徳の法を修せられき。然るに此の競馬は端なくも惟仁親王の勝となりぬ。されども叡慮これに満足し給はず。更に大裡にして相模の節會を行はしめ給ひ、重ねて勝負を叙覽あり。此の時惟喬親王の方よりは、外祖紀の名虎をば出だされぬ。名虎身の丈高くして七尺に及び、腕の力強くして六十人を兼ねと聞ゆ。惟仁親王の方よりは、能雄の少將とて、骨格いと名虎に劣り。その片腕にだに堪ふべくも見えぬと。御夢想ありて撰び出だされしと聞ゆ。日頃よりかたぐいに心を

寄せ奉りし月卿雲客、東西に引別れつゝ、勝負いかにと眸を凝らすに、名虎の力いみじくして、能雄しばし危ふければ、藤氏の注進山門に馳するもの。恰も櫛の齒の如し、慧亮之を聞きて憤慨し、獨銛を以て頭を破り、腦を碎きて護摩に焼きつゝ、一心不亂に祈りぬるに、名虎の勢ひ漸く衰へ、遂に敗るゝ所となりぬ。是に依て惟仁實位に即かせ給ふ。清和の帝是也(此の事平家物語那都羅の事。源平盛衰記惟喬惟仁位論の事。元亨釋書慧亮傳。江談抄。曾我物語等の諸書に見ゆ)されども是は俗説のみ、當時は既に名虎の没後、殆ど一と昔の年を経たるに、なほ其人を出だせるよりして、總ての事皆僻事ならずといふ事なけれど、また全くの迹なしとにもあらざるべし。即ち惟喬親王の爲め、御門眞濟僧正に命じて、何事か祈らしめ給ひし事ありしなるべく、紀藤兩氏互に相争ふに、或は紀氏に憑く者あり、或は藤氏に従ふ者あり、雲上爲めに沸騰したりけむは推し

て知るべし。されば此の秋にあたりて。惟喬親王派の首領の人。い
かで藤氏に抗せざらむ。

一時の風雲たゞならざりけむ此の争ひも。遂に跡なく收まりしか
ど。朝臣等はなほ事につけつゝ藤氏を仆さんと謀りしが如し。され
ば此の間藤原良房等。強て御門に請ひ奉りて。屢々朝臣を京より追
ひ。謹慎に籠らしめなどしたりけらし。集中に。身のうれへ侍りし
時津の國須磨の浦といふ所に罷りて住み始めけるに『難波津を今日こ
そみつの浦とに是や此の世をうみ渡る船』また。田村の御時ことに
あたりて津の國須磨の浦といふ所に籠り侍りて都の人に遣しけるわ
くらはに問ふ人わらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ』(此の
歌の作者。古今集に在原行平朝臣とある本は正しからず。詳しくは
集中に論すべし)また。思ふ心ありて前の太政大臣(良房)に寄せ侍り
ける『頼まれぬうき世の中を歎きつゝ日かげにわぶる身を如何にせむ』

等の歌あるは蓋し其當時の詠なるべし。彼の東國に下向せられしも。
或は遠ざけられしに依る歟。文徳の帝は常に惟喬親王に御讓位の御
志ありしなれば。いと々朝臣をも寵愛し給ひしならめど。良房等が
強て請ひ奉るには爲む方なかりしにて。朝臣を遠ざけ。はた謹慎に
籠らしめなどし給ひし事は。眞の御心にてはおはしまさざりしなる
べし。斯くて幾程も無く文徳の帝崩御し給ひにしかば。良房直ちに
藤浪の由縁色濃き惟仁の御子を御位に即かせ奉れるに。朝臣が思ひ
構へたりけむ志は。遂に全く水泡に歸しぬ。此の時朝臣三十四歳な
り(文徳帝崩御の當時は。朝臣は彼の東の旅にさすらひて京にはあら
ざりし歟)是よりしては又爲す事を得るに由なく。たゞ世の中を頼み
なきものに思ひ憤りて。色にまぎれつゝ年月を送り給ひしが如し。
集中しばしば悲憤の情を洩らされたる歌あるは。即ち當時の詠なる
べし。

朝臣の東下

朝臣が東下りの事。また正史記録に見る所なし。たゞ古く物語として世に聞えたる傳に云。業平朝臣。二條の后高子のまだ凡人にておはしける時。忍び忍びに御契を籠め。遂に袂を連ねて春日野のわたりに通れ給ひしを。國經基經等いへる高子の兄人の。隕家を索ねて取り返しけるが。其憤のやすめ難くて。朝臣の鬢を切りしかば。其髪を生ふさむひまに。歌枕どもうち見むとて。東の方へ行きけり。斯くて陸奥に到りて八十島と云ふ所に宿りける夜。野の中に歌の上の句を詠ずる聲あり。其詞に曰く「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ」と。怪しく思ひて聲を尋ねつゝ是を求めけるに。土にまみれし鬮ありて。其眼の穴より海一と本生ひ出でたるが。風に靡く音の斯く聞ゆるなりければ。怪しさに堪へずして里人に此の事を問ふに。

或人語りて曰く。小野の小町この國に下りて此の處にして命をはりにき。すなはち彼の鬮體これとも言ふ。業平朝臣これを聞きて哀れむ事限なく。涙をおさへつゝ下の句を續けて』をのとは言はし薄生ひたり』と歌ひ。鬮體を葬りて厚く其跡を弔ひけり云々といへる是なり。朝臣の東下は斯かる物語としてのみ世に傳へらるゝをもて。後世の史家の是を論ずるもの甚だ多く。且つ言ふ所區々也。その或人は是を論じて。全く無根の事なりとなしぬ。されども朝臣が東國にして詠みける歌の。その没後僅に二十五年にして撰ばれし古今集中に出でたれば。正史に其事の見えざればとて。無根なりとは做し難からむ。是等は所謂横紙を引き裂きたる如き論にして。採るに足らざるものとすべし。

また或人は。竊かに同志を糾合して。藤氏を仆さむの陰謀ありしに因る歎と説きぬ。されど朝臣が東下の歌に。うらやましくも歸る

波かなと。いと都に遠ざかり行くを悲しむ。夢にも人に逢はぬな
りけりと啣ち。きつゝなれにしつましあれば遙々きぬる旅をしぞ思
ふと歎かれしが如きを見るに。親ら進むで下向せられしものとは覺
えず。殊に朝臣が藤氏を寤しむるに。數百の軍旅にも増れるものは。
その惟喬親王を擁護して立てるにあり。然るに自ら京を離れて。遙
遙と憂き旅にさすらひつゝ。いかで寄らむ寄らむ定かにもあらぬ人
をかたらはん事をかはすべきとぞ。

また或人は云。當時藤原氏が權威を保つ唯一の武器とも謂ふべ
きは。其女子をして皇室に入らしむるにありき。されば彼の高子の
如き。容色天が下に並ぶ者なきさまなりしかば。次の帝の后がねに
と定め置きたりけむを。在中將忍びに通ひて。そゝのかし出だしな
どせしかば。藤氏の驚愕たとふるに物なく。其中らひを割かむが爲
に。東國に追ひ下しけるならむと云へり。按ふに是は彼の物語より

思ひよられし説なるべく。可もなくまた不可もなきにや。

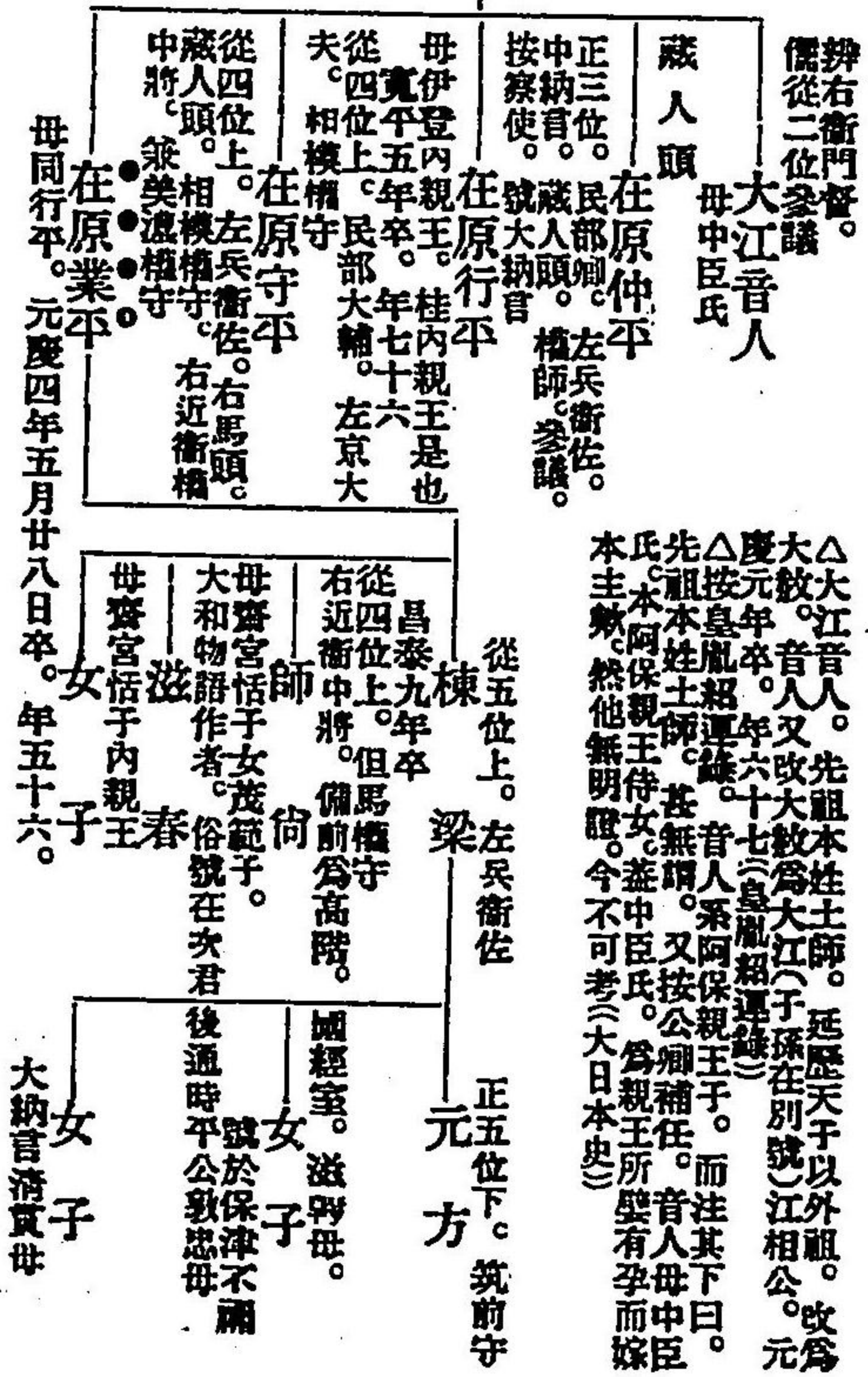
また費隱堂の翁は曰く。朝臣は常に惟喬親王の蔭に隠れて。絶え
ず藤氏の動靜を窺ひ。咄嗟の隙に乗じて之を仆さむと謀りしが如し。
されば藤氏は是を怕れて。何等かの任を負ふせて東國に追ひ遠ざけ
しなるべし。嘉祥の末年。惟仁の御子は既に太子に立たせ給ひしも。
いまだ襁褓の裡におはしませば。何事につけても便勢きに。惟喬親
王はしも第一の皇子にて。賢明の聞えなみなみならず。父帝の御寵
愛はたいと深くおはしますすが上に。才學ならび格れる朝臣の誰かり冊
きてさへあれば。虎に翼を添へたるに似て。藤氏にとりては。俗に謂
ふ頭上の蜂なりし事推量るに難からず。此の間に於ける藤原氏の苦
衷寔におもふべし。諺に云。將を斃さんとせば先づ其馬を射よと。
けだし朝臣は藤氏の一と箭にかけられしにぞあらむと。これ或は然
らむ歟。又云朝臣が東國に下向せられしは。彼の高子に通はれける

より幾程もなきが如くなれば。天安の末に旅立たれしにや。されば其東下りを高子に通はれしに因る如く後人の作り做したるならんが。その貞觀三四年の頃歸洛せられしよし云ひ傳ふるは然るべき歟と。是亦至當の説なるべし。

在中將系圖

皇胤紹運録は、音人、行平、守平、業平、仲平を以て次序としたれど、公卿補任に行平朝臣を第三子と爲し、三代實録及び大鏡裏書に業平朝臣を第五子と爲し、榮華物語、江次第の二書、また共に在五中將と稱へたれば、紹運録なるは謬れるが如し。されば今茲に掲げしものは、三代實録なる阿保親王上表文の次序に據りぬ。また大江音人及び師尙真人につきては、今考ふる所なければ、しばらく紹運録のまゝにてある也。

平城帝第三皇子
阿保親王
三品彈正尹兼上總太守。
贈一品。
母善長藤原姫(萬井藤子)
或云從五位上桑田(良藤繼道女)
承和九年十月癸年五十一



在中將年譜

在 中 將 年 譜

- 天長元(淳和天皇) 桓武第 紀元壹千四百八拾四年
 - 二 樂平王生.....一歲
 - 三 賜姓在原朝臣.....二歲
 - 四 道廣親王(文德天皇)生.....三歲
 - 五 藤原國經生.....四歲
 - 六.....五歲
 - 七.....六歲
 - 八 源融君(河原左大臣)此年十歲.....七歲
 - 九 行平朝臣十五歲.....八歲
 - 十 淳和帝崩.....九歲
 - 承和元(仁明天皇) 嵯峨第二皇子.....十歲
 - 二.....十一歲
 - 三 藤原基經生.....十二歲
 - 四.....十三歲
 - 五.....十四歲
 - 六 紀有常二十五歲.....十五歲
-
- 七 淳和天皇崩壽五十五.....十六歲
 - 八.....十七歲
 - 九 父君阿保親王薨年五十一〇二條后生.....十八歲
 - 十.....十九歲
 - 十一 惟喬親王生(文德第一皇子。母更衣紀靜子)廿歲
 - 十二.....二十一歲
 - 十三.....二十二歲
 - 十四 補藏人正〇紀名成卒 紀有常紀靜子之父.....二十三歲
 - 嘉祥元.....二十四歲
 - 二 叙從五位下(正月七日).....二十五歲
 - 三月仁明帝崩〇三月惟仁親王生(文德第四皇子)〇四月文德帝即位〇十一月惟仁親王立太子.....二十六歲
 - 仁壽元(文德天皇)仁明第一皇子.....二十七歲
 - 二.....二十八歲
 - 三.....二十九歲

序

論

- 齊衡元.....三〇歲
 - 二.....三一歲
 - 三 藤原高子(二條后)十五歲.....三三歲
 - 天安元 藤原良房為太政大臣.....三三歲
 - 二 文德帝崩壽三十二.....三四歲
 - 貞觀元(清和天皇) 文德第 四皇子 御年十歲.....三五歲
 - 二.....三六歲
 - 三 母君伊登內親王薨(九月).....三七歲
 - 四 叙從五位上(正月七日).....三八歲
 - 五 任左兵衛佐(二月十日).....三九歲
 - 六 任左近衛少將(三月八日).....四〇歲
 - 七 任右馬頭(三月九日).....四一歲
 - 八 藤原高子(二條后)為女御。年廿五.....四二歲
 - 九.....四三歲
 - 十 藤原高子生陽成帝 清和第 一皇子.....四四歲
 - 十一 叙正五位下(正月七日).....四五歲
-
- 十二.....四六歲
 - 十三.....四七歲
 - 十四 勞問渤海客(五月十七日) 惟喬親王薨(年廿九) 攝政藤原良房薨(年六十九).....四八歲
 - 十五 叙從四位(正月七日).....四九歲
 - 十六.....五〇歲
 - 十七.....五一歲
 - 十八.....五二歲
 - 陽成帝即位〇二條后為皇太夫人
 - 元慶元 〇紀有常卒(年六十三) 任右近衛中將(正月十五日) 叙從四位上(十一月二十一日).....五三歲
 - 二 兼相權權守(正月十一日).....五四歲
 - 三 任藏人頭(十月).....五五歲
 - 四 兼美濃權守一日 〇五月廿八日薨.....五六歲

朝臣の歌と伊勢物語

在中將の歌、多く伊勢物語に出でたるを以て、人みな伊勢物語をば朝臣の歌集の如くに思へど、是誤れるの甚しきもの也。伊勢物語は其名の如く、素一篇の作り物語にして、或は萬葉の歌の一言一句を變じ、作意を異にして是を對手の歌とし、或は上の句を古歌に採り、下の句を古今集に捉へ、合せて一首と做して是を返歌に据ゑ、或は讀人知らずの古歌、借は作者みづからの詠とも覺しきものを屢々加へて、皆がら朝臣の歌の如くに書き做し、是に眞事虚事うち交へて、艶に面白く作りなされしなれば、朝臣の歌も其物語の作意につれて、大槩は其本意を失へり、猶それのみか朝臣の歌をも、さまざまに作り改めし所あれば、伊勢物語に出でたるは、朝臣の歌にして朝臣の歌にあらず、いかんぞ彼の物語一卷をもて、朝臣の歌集と

は見做すを得べき。いかでかは彼の物語によりて、朝臣の歌の眞意をば知る事を得む。されば朝臣の眞詠にして、其眞意をば辨へむとは、正しき家集に據らずんばいかで能はむ。

附言。伊勢物語の作り物語なる事は、今は普く世の人の知る所なれど、なほ先哲の論一二を掲げて、讀者が参考の資に供ふべし。

▲加茂眞淵翁云。伊勢物語と名づけたるは、是に説多かれど諸なるは聞えず。荷田東萬侶大人の説二つあり。其一つは、初の條ならずと雖も、伊勢齋宮の事また末にも伊勢の事出でたり、仍て名づけしと云説あるに據るべきにや。總て古へは斯かる物の名をいと輕き事に依て付待る事、唐、大和ともにしか也。其上此後に書きし大和物語と名づけしなど對へ思ふべしと。今思ふに是ぞ安らかにして古へめきたる。又一つは、清輔の朝臣の袋草紙に云。有密事之故、爲辨事之由、伊勢物語、詠に伊勢は僻事と云故也。是を以て思ふに、此書は男女のたはくる僻事のみ擧げたる歌、或は時代ことなる歌を以て贈答を作り、或は歌の本は萬葉を用ゐ末には古今を取て一首の歌とし、或は全くあけても端の詞を加へて異るるを思はせ、或は詠人をも異にし、時代官位の次序をもたがへなどしつゝ、ち

なち僻事ひがことならぬばあらざりけらし。されば僻事ひがことてふ心もて。伊勢物語とは云なりけり。さて伊勢に僻事ひがことてふ語のあるは。堀河後度百首に『伊勢ならば僻事ともや思はましやまとなるてふみまさかの池』と見え。後にも鴨長明が歌に『伊勢びとは僻事しけり津島より甲斐河ゆけばいつみの、原また西行法師も伊勢人はひがごとしけりさ、粟の笹にはならで柴にこそなれ』とも詠みたり。その伊勢に僻事ひがことてふ語あるは。眞淵考ふるに。むかし伊勢人の心はいと悪くして。親子兄弟の物をも互に掠め取りしなどいふこと今昔物語に見えたり云々。又云。斯かる書を物語と名づけたる事は。實錄の如くはあらで。世の人の語り傳へ來し事を。眞言寓言をも問はず。その語るまに。書集めたるてふ意にて。今云ふむかし。例たとなし物語に同じ。然はあれども文よく書きたれば。こよなき心やり種たぐとぞなれりける。然るを後の世の人は。物語てふ名をいかに心得つらむ。殊に虚事うそことに云ひなしつる此の伊勢物語をば。實錄の如く思へること。いぶかしかりけれ云々。又云。或説に伊勢物語は業平朝臣一期の事を親ら書きたり。依て初冠より終焉の歌に及べりと。此書の業平朝臣が自記ならぬ理りは己に云ひつ。誰その人の初冠より自らみづかが事を書きそめて終焉しまはの時にして書きはつる人やはある。また顯昭が古今秘注にも此書は古今集より前なるものと思ひて書るは。自記など、思ひてなるべければ。言ふにも足らず云々。

▲加納諸平翁の伊勢物語論に云。伊勢物語は僻事ひがこと物語といふなぞ。なる事は。清輔朝臣の既な云はれたるが如し。僻事ひがこととは定かなる事をあらぬさまに書きなしたるを言ひて。たゞ密事ひそことのみを言へるにあらす。總て物語は道々しき事にはあらで。男女の中のあるまじき事どもをさへ書きて。見る人にあはれと思はするみそかぶみなれば。此の密事ひそことのみ。わきて僻事ひがこととは云ふべき。二條の后に通はれたる事を。いみじき罪に誰も言へど。其代のさまを知らぬまどひにて。あらぬ強説しやうせつなり。げに今の世などにてさる事あらむには。僻事ひがこととも云ふべけれど。男女の道いたくみだりがはしき世の中なるが上に。入内し給はぬ凡人にてさへおぼす程なれば。何ばかりの事にかはあらむ。季治云。此説塞にさる事なり。既に服部南郭翁も是を論じて云。上略。至至如其好色。牀第不修。世固病焉。然觀其世。唯宜淫是。一時貴遊子弟。乘危垣。望復關者。握手無罰。目眈不禁。則習命之使然也。乃病其風俗乎可也。奚爾實在中將爲攝首哉。中略。夫小野王。失志自匿也。紀氏雖微。亦傲世不改其樂也。乃在中將之周旋其際。締交款曲。終始如一。豈不偉哉。假令在中將無不軌於正義。蓋亦足多哉。粹粹然佳公子也。云々。親王の御子にて似つかはしからの御中らひにしもあらねど。御兄たちの甚く制し給へるさまなるは。入内させんの下の御心なればなり。さればそは御兄達の上にてこそあれ。世の中なべてさやは思ふべき。さらば何をもて僻事物語ぞと云ふに。こはもと在

中將の自記に有りし事どもをひき出で、あらぬさまに作りたれば也。作れる時代は後撰の次と云へる既正しかるべけれど。惟喬親王の御上に付て。彼の朝臣の世なうとまじう思ふ頃。來し方の事ども又詠める歌など。心なぐさに自ら書き置かれし記の。筈の底などに残りて世に傳はりたるまゝに。古今集にも其記より撰び出で、載せられたるなるべし。そは彼の集に入りたる歌の端書ことに長く。また伊勢物語とをさくたがはぬもあるにて知られたり。斯くて後事好める人の。あらぬさまに作りなして。異なる事をも加へて。初冠より身まかれる迄。業平の事にて業平ならず。たしかに夫とわき離く書きひがめたるなん作者の心しらひにて。それ即て僻事物語にはありける。かゝればいづれを自記の條。何れを加へたる條とも。作者を離ちては其世にても定かには別き難かりけらし。まして今の世にしては。まさに別きなんや。是は二條の后云々など云へるは後人の裏書なりといへど。朱雀院の塗籠御本を始めて。何れの古寫本にも見えなれば。もとよりありしにて。やがて作者の自ら書きたる裏書なるべし。彼の御兄達の見つけ給へるなど。自記にもさる様さまにありけむを。鬼に喰はれたりと作り更へたるなど。作者の面白き趣意なるを。其事知られざれば夜よの鏡なりとて。裏書になしたるにこそあらめ。かゝれば此の裏書の事ども。なか／＼確たしかなるがあり。東下りは跡なし事を彼の朝臣の造り設けたるやうに云ふ人もあるは。史に見えぬになづみて云へる論

にして取るにも足られど。彼の條にもあらぬ事を書き加へたりとは見え。舊説に『伊勢の御の書き續ぎたり』といふはうけがたけれど。自記の有りしに後人の書き加へたりと云ふ證にはなりぬべし。あはれ自記の中には。惟喬親王の御上につきての事も尙あまたありて。今も傳はりたるには。當時そのときの事をまゝめに見るが如きもあらむを。いと／＼口惜しう思へど甲斐なし云々。(此の他尙諸説多けれど。大概この二つの論の外に出でず。即ち伊勢物語は。たゞ世の人の語り傳へ來し事の。虚事實事を問はずして。筆のまに／＼書き流したる作り物語なりと云へると。もとは在中將の自記やうの書ありしなるべく。夫をば事好む後人のさま／＼に作り改めて。一篇の小説にしたてられし也との二説にて。是を朝臣の自記也と説けるものは。學者の齊しく非とする所となりぬ。さて此の二論の是非につきて。又種々に論へるものあれど。本書につきてはさせる要も先ければ。くだ／＼しく記さすなりぬ。

本書と業平朝臣集及び同拾遺集

本書は、業平朝臣集及び其拾遺集を合せて一卷の全集となし。是に評釋を加へたる物にして。毎首その評釋の後へに。朝臣の歌を本

として詠める後人の歌(廿一代集、新葉集、月清集、拾玉集、長秋詠藻、拾遺愚草、拾遺員外、壬二集、頼政集、源氏物語、狹衣、等に
出でたるもの)を出だせり。是は朝臣が歌の如何に世々にもてはやされしか。將その歌の如何なる詞か美妙なるものにて、其美妙なる詞を假りて後人の如何に詠めるかをば、自みづから知ぬべき便に倣なまさんとて也。

業平朝臣集一卷。今の世に流布するものは、群書類従本一卷あるのみにして他に類本を見ず。こゝに己が所藏せるは、其奥書に、右業平朝臣集以在原寺所藏之正本書寫了病懶之短筆可耻之。永和二年無射二十日藤原爲敦花押(此人新續古今に侍従爲敦とて其詠見えたり)と記されたる古寫本にして、その塙本(群書類従本)と異るところは、頼めつ、逢はで年ふるいつはりかへし女にこりぬこゝろを人は知らなむなつむしの知る知るまどふ思ひをばこりぬ悲しと誰か見ざらむ

よひの間に早なぐさめよいそのかみふりにし床も打ち拂ふべく伊勢の海に遊ぶ海士とも成なてしが浪かき分けてみるめかづかむの四首集中に見えずして、

さくらばな散りかひ曇れ老おとらくの來きむといふなる道まがふがにといへる一首入りたり(是等の事詳しくは集中に言ふべし)なほ屢々塙はな本と異なる所ありて、いとゞ證本たるべければ、是を塙本に校なじ合せて評釋は加へぬ。此の書は巻尾に朝臣が終焉の歌を据ゑたれば、其自記ならぬは固よりなれど、古く朝臣の孫女おほつふねが筆を染めしもの。在原寺にありと云ひ傳ふれば、朝臣が自ら記し置かれしものありとせば、其書に最も近かるべし。

拾遺集一卷は、二十一代集(古今集、後撰集、拾遺和歌集、後拾遺集、金葉、詞花集、千載集、新古今、新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉集、續千載、續後拾遺、風雅集、新千載、新拾

遺。新後拾遺。新續古今集(中に朝臣の歌として出でたるもの、限を集めてものせり。然れども尙其疑はしきもの六七首を省きぬ。たとへば續後拾遺集に出でたる。

我がたによると鳴くなる三吉野のたのむの雁をいつか忘れむ
また新古今に見えたる歌にて。

思ふには忍ぶる事ぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばわれ
あしのやの灘の鹽やさいとまなみつげの小櫛もさゝす來にけり
などの如し『我が方かたによると鳴くなる』の歌は。伊勢物語古意に。此歌より陸奥迄が歌(伊勢物語に出でたる歌にて。武藏野は今日はな焼きそ云々の歌より。くり原のあねはの松の人ならば云々の歌に及べる六七首をいふ。其中に此の歌含まれたり)は業平朝臣の歌にあらず。記者の作れる也と眞淵翁の説かれしは。朝臣の詠風を能く辨へられし言にして従ふべし。また『思ふには忍ぶる事ぞ』の歌は。古今集讀人

知らずの『思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひし物を』
の上の句を取り『命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへばかしからさもあ
らばなかにわれ』の下の句とをば取り合せて伊勢物語の作者の作れる歌にて。
在中將のにはあらず。是はは既は先哲も説き置かれたる事なれば。今
更に論らばむも鳴辭なるべし。また『蘆のやの灘の鹽焼き』の歌は。萬
葉集なる『志賀の海士はめ刈り鹽焼きいとまなみ髪かみ梳かの小櫛とりも見
なく』と云へる歌の詞を變へて。伊勢物語の作者が。蘆のやの里の
古歌にしたてられたる也。されば彼の物語にも。此の歌は蘆の屋の
里を詠める古歌なりとありて。朝臣の歌とは記したらず。即ち是等
の疑はしきもの數首を省きて一卷としたれば。此の集に收めし歌は。
皆がら朝臣の詠として失なかるべし。

朝臣の歌

業平朝臣の歌は、奇を求めずして自ら奇しく、巧を求めずして自ら巧みに。すがた艶に言葉麗はしくして、しかも粉黛を施し、迹なく。天地を動かし鬼神を泣かしむるの感情、三十一字の外に溢れて、餘情雲霧の湧くが如く。その響き清くすゞしく、あだかも千顆萬顆の眞珠を、盤上に走らすものに似たり。

紀氏かつて古今集の序に、朝臣の歌を評じていへらく、その心あまりて言葉たらず。しほめる花の色なくして句ひ残れるが如しと。その心あまりてとは、極み無き感情一首の外に溢れたるを云ひ。言葉たらずとは、その感情あまりに深く、其餘情あまりに廣きが故に。今少し詞を添へざれば、聞え難き節あるが如くなるを謂ふなり。しほめる花の色なくして句ひ残れるが如しとは、更に先きの評をば繰返したるにて、其うた花やかなる色なきが如くなれど、その芳香は依然として一首の上を離れず、懐かしくはた奥ゆかしき姿ありと也。

朝臣の歌

序

論

然らば其こゝろ餘りて言葉足らざるは、朝臣が歌の短所とすべき歟。あらず。是やがて朝臣が歌の、貫之、躬恒、備は遍昭、黒主、喜撰、康秀、小町等の人々にも、一と際勝れて傑出でたる所にして、所謂朝臣の長所なり。即ち常の歌人にしては、あまりに情深く景廣くして、文詞もしくは長歌ならでは、能く言ひ盡し得べからぬをも。朝臣は巧みに言葉を省きて、しかも其連續を断つ事なく、一種いふに言はれず説くに解き難き口調を以て、是を三十一字の中に、麗はしく言ひ含むるの妙技を持てるものにして、人の能く及ぶべき所にあらず。されば古今集以後の歌人、争つて朝臣の詞花言葉を假れども、其姿をとりて其風を得られたるもの無し。これ他なし朝臣が歌には、朝臣ならではまた綾なし得べからざる獨特の口調あればなり。紀氏が所謂その心あまりて言葉足らざるもの是也。されば朝臣の歌にして、若し其言葉足り其心餘りたらざらむには、世の大方のとい

かて擇ばむ。従て後世の歌びと等。誰か其詠を絶妙と呼び。誰か其人を歌聖とは云はむ。

蓬室翁が歌人論に云「ものは盛なる時に勝れたらむよりも。衰へたる時に方りて其道を失はざらむこそ尊かるべけれ。古への御世御世は更なり。藤原。寧樂の御時こそ。和歌の道さかりなりと申すべけれ。其世に當りて人麿。赤人など云へる歌の聖いましけり。げに其道には古へ今をかけたるすぐれ人と申すべきなれども。盛なる時に當りて出でられたるは。其世にありては自からしかもありぬべきが如し。弘仁天長の頃となりては。上の好みに倣ひて詩さかりに行はれ。我が敷島の道あるか無きかになりもて行きつゝ。ほとく地をはらふにも至れり。さるを其時に當りて世のさまに誦はず。やまと歌に心をよせられたるは。野宰相。在納言。さては僧正遍昭。堀川の太政大臣などこそは。ひとり尙この道を能く守られたりとは申す

朝 臣 の 歌

序

論

べけれ。中にも業平朝臣。小野小町。伊勢の御などいともでたき歌詠みなり。是等の人々こそ。道の衰をもておこしたる勳は。人麿。赤人にも耻ぢずと申すべけれ。仁和の帝この道を好み給ひしより。下も自ら其風に靡きにけり。延喜の頃に至りて。再び斯道さかりになりもて來つるまゝに。貫之。躬恒のぬしたち出でられたる。げに古へにもやゝたちまされりけり。此の御時に當りてこそ。勝れたる人々も數多出で來にけれ。されど其盛を其世に見つるは。彼の衰へたりし世に守られけむぬしたちの。遠き勳とぞ申すべき。盛なる時にすぐれたらむは。げにめでたき事にはあるべけれど。衰へたる時に方りて。古へのさまを失はずいましけるぬしたちこそは。さはいへどなほ斯道の聖とは申すべけれ」と。あはれ朝臣等の世に出でざりしならむには。神の御代より傳はりし我が敷島の道。またく地を掃ふに至りしか將知るべからず。かしこくも彼の衰へたる時に方りて。

在中將は生れ出で給へるものか。朝臣は歌人として既に皇國の文華に盡すところあり。斯くて又おのづから此の功績の埋れ難きものあるは。寔に斯の道の棟梁の臣とこそ謂ひつべけれ。世の常のさかりをこえてなかなかしほめる花の匂ひゆかしも。

評釋業平全集

(業平朝臣集評釋)

二條の后きさきの。まだ東宮の御息所みよすんごころと申し、折。大原野に詣で給ふに。

二條の后は、權中納言贈正一位太政大臣藤原長良朝臣の女。名は高子たかき。清和帝の貞觀の初年宮仕に出で、從五位下に叙せられ、同八年女御と爲り。九年正五位に進み、十年東宮(陽成帝)を生み奉り。十一年從四位下に昇り。十三年從三位に叙せられ。元慶元年皇大夫人と爲り中宮と稱す。六年皇太后に上り。延喜十年三月六十九歳にて薨じぬ。是より先き(寛平八年)故ありて后位を停められ給ひしが。薨後卅三年を経て天慶六年に至り。再び后位に復せられぬ。始め二條の后。未だ十五六歳の程にて宮仕にも出で給はざ

りし時。業平朝臣忍びに通ひ給ひて。かたみの御契り淺からず。共に春日の里のあたりに隠れ給ひし事などありき。大鏡に。二條の後の御事を書き連ねて『此の後の宮仕し給ひけむ様こそ覺束なけれ。いまだ世隠りておはしける時。在中將忍びて率ひて隠し奉りけるを。御兄人の君たち。基經大臣國經大納言などの。若くおはしけむ程の事なりけむかし。取返しにおはしける折。妻も籠れり我も籠れりと詠み給ひたるは此の御事なれば。末の世に神代の事もとは申し出で給ひけるぞかし』云々と見えたり○東宮の御息所。御息所とは天皇の御寢に侍するもの也。其の名もと天皇の休憩し給ふ便殿より起れるを以て。更衣を指して言へる也。然れども亦女御をも謂ひ。また御寢に侍すれども其職名なき者をも謂へり。素これ一箇の私稱にして此の時代に起りし名也。鳥羽天皇以後には又見えずして。専ら皇太子。親王の妃の稱となれり。されば此處

なるは東宮を生み奉れる女御と言ふに同じ○大原野に詣で給ふに山城國乙訓郡に大原野社あり。こは三笠山なる春日明神をば。閑院、左大臣冬嗣公の此所に勸請申されしにて。即ち藤原氏の祖神天兒屋命を祀れる社なり。東宮の御息所は其御裔なれば參詣し給へるにて。此の時の事江次第に。大原野行啓起五條后以藤氏勸學院衆爲車副二條后以姪乘車後在五中將書和歌與二條后云々と見ゆ。おほはらや小鹽のやまも今日こそは神代の事もおもひ出づらめ

此の歌古今集に出でたり○大原や小鹽おしほの山。此のや文字は地名を重ねて云ふ時。其中間に据うる助辭にて。上と下との場所異なるを二つ並べたるにはあらず。上なるは廣き地名にして下なるは其中に含まれたる地名也。更科や姨捨山。葛城や高天山など。此

の類古歌に多し。茲なるは大原小鹽の山に鎮座せる神と云ふ意にて。即ち天兒屋命を指したる也。○神代の事。天兒屋命の神代の舊事を云ふ。日本書紀に。是時天照大神。手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰。吾兒視此寶鏡當猶視吾。可與同床共殿。以爲寶鏡。復勅天兒屋命。太王命惟爾。二神亦同侍殿内善爲防護。云々とあり。一首の意は。天兒屋命の御裔なる人の。殿内を離れずして親しく天皇に奉仕するの人となりて。今日かく詣で給へるにつけては。此の社に在す天兒屋命も。彼の神代の古へ。皇孫尊に奉仕して殿内を離れず善く忠勤せよとの大神の勅を承りし御自身の舊事をも思ひ出し給ひて。さこそ御満足に思召す事ならめと也。されど是は只表面の心にして。其本意とするものにはあらず。裏面には彼の二條の後の未だ宮仕にも出で給はざりし時朝臣と契りし舊事をば。神代の事と言ひ紛らはし。大原や小鹽の山を御息所に喩へて。

東宮の御息所も今日此の業平と車を連ねて春日明神に參詣し給へるにつけては。古へ此の業平と契りし事。彼の春日の里に共に籠りし舊事などをも思ひ出だし給ふ事ならむとの意をば竊かに言ひ含めたる也。一首御息所の榮譽を稱ふる物の如く。巧みに神代の故事を捉へて言ひ紛らはしつゝ。人知れずゆゝしき密事をほのめかしたる。歌聖の妙技驚くに堪へたり。殊に神代と言ひて舊事の意を思はせたるは。面白くも思ひよられし警語と謂ふべし。されば後の世に『住吉のまつこそ物は悲しけれ神代の事もかけて思へば。源氏物語添標』『しめの内は昔にあらぬ心地して神代の事も今ぞ戀しき。繪合』など。さながら其心其詞を籍りて歌へるもの妙からず。玄旨法印も此の語を深く嘆賞して。諷の歌などは此詠を本とすべしと云へり。また後人の詠める歌に。小鹽と措きて神代と連ねたるもの、甚だ多きは。皆がら此の詠あるに依りてなるが。さるに

ても其いかばかりか世々にもてはやされけむ。おしはかるべし。

本歌

業平初臣

おほはらや小鹽のやまも今日こそは神代の事もおもひ出づらめ

續古今集

藤原信實

をしほやま野邊の小松のあき風に神代もふりてすめるつきかげ

續拾遺集

山階入道左大臣

ちはやぶる小しほのやまの峰に生ふる松ぞ神代の事は知るらむ

新後撰集

前左兵衛督教定

をしほやま知らぬ神代は遠けれどまつ吹く風にむかしをぞ聞く

續千載集

正三位爲定

おほはらや小鹽のさくら咲きぬらし神代の松にかゝるしらくも

續後拾遺

左大臣

おほはらや小しほの山のほとゝぎす我に神代のことかたらなむ

續後拾遺

從三位氏久

つもるらむ事をば知らずをしほやま神代の松にふれるしらくも

風雅集

藤原爲氏

ふりにける神代も遠し小しほやまおなじみどりのみれの松ばら

新千載集

正三位爲定

櫻の花盛に。久しく罷らぬ人の許へ罷りたれば
あだなりと名にこそ立てれさくらばな年に稀なる人
も待ちけり
と云ひければ。かへし
今日こそば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありと
も花と見ましや

ちはやぶる神代も聞かぬくれなゐに小しほの山は紅葉しにけり

新續古今

後八條入道前内大臣

知るやいかに小しほの山のみれの松われも神代のおなじ種かは

此の贈答古今集に出でたり○あだなりと。あだは。男女の上にては薄情の意。櫻の上にては花の散り易くして頼み難さを云ふ○

名にこそ立てれば。評判には立ちてあれども意なり。此の詠は自身を櫻の花に喩へて、いま訪ひ來れる朝臣の無沙汰勝ちなるを甚く怨じたる歌なり。

一首の意は。櫻の花は散り易きあだなる物なりとの名を得たれども。中々あだなる物にはあらず。一年の中に訪ひ來る事の稀なる人をも心長く待ち居て。散りうつろはでありしぞかしの意にて。女の上に取りては。女の心は變じ易くあだなるものにて。頼みにはなし難しと世上の人は評判すれども。なかなかに我のみは然らず侍り。君が訪ひ給はざりし長き月日の間。他人には心を染めずして。心長くも君をのみ待ち居たりき。との意にて。あはれ一年の内にも訪ひ來る事の罕なる君こそはあだなる御心なれ。などの餘情を含めるなり。

今日來すばの歌は即ち此の返歌にて。對手の人。自身をば花に

喩へて云ひしに依り。朝臣また對手の人をば。さながら花に喩へて詠める也。一首の意は。君は此の庭の櫻のあだならずして。我が訪ひ來れるを心長く待ち居たるが如くに云はるれども。甚だ其謂れなし今日若し我が訪ひ來らざりしならむには。花はもと散り易きあだなる物なれば。明日にもならば散り亂れて。雪の如くに降るならむ。假令誠の雪の如く。消え失せずには有りといふとも。いま此處に見る如き花とはいかで見らるべきぞ。然れば今日我が訪ひ來れるは。花の爲めの僥倖にして。君の所謂花に眞實の情あるにはあらず。花は固よりあだなる物にて。今日その花の散らぬ間に訪ひ來れる此の業平こそ深切の情はあるなれとの意にて。女の上を取傲しては。明日にもならば君の心もうつろひ變りて。他人にも契りをかはし。我をば見捨て給ひやせん。よしや全く我をば見捨て給はでありとも。今日の君とは同じからじ(以下花の上に

て説ける心を添へて見るべしとの意を含めり。一首よどみ無く調べおろされて。艶なるが中にまた力入りたり。殊に對手の花をわだなる物ならずと言ひしに。否わだなりなどの詞を挿挟せずして。巧みに其意を餘情に含められたるは。朝臣獨特の口調にして。能く人の及ぶ所にあらず。彼の藤原基俊卿の如き。好んでかたくなる評を下し、人さへ。その悦目抄に此の一首を出して。返歌の一體の例と做し。朝臣は殊に返歌をよくしける也と深く嘆賞したり。

四八

本歌

業平朝臣

けふ來すは明日は雪とぞ降なまし消えずはあり共花と見まじや

新古今集

太上天皇

今日だにも庭を盛とうつるはな消えずはありとも花かとも見よ

新後撰集

藤原家隆

明日もなほ消えずはありとも櫻ばな降りだに添はん庭の雪かは

世のなかに絶えて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし

なぎさの院にて櫻を見て詠める

渚の院は河内國交野郡にあり。惟喬親王の常に御遊ありし所也。

此の歌。古今集に出でたるが上に。貫之朝臣の土佐日記にも「波瀾の院と云ふ所を見つゝ行く。此の院。むかしを思ひやりて見れば。面白かりける所なり。後なる岡には松の木どもあり。前の庭には梅の花さけり。こゝに人々の曰く。是は昔名高く聞えたる所なり。故惟喬の御子の御供にて。故在原業平の中將の。世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからましと詠める所なりけり。」など見えて。世に陳れなき歌なり。

四九

一首の意は、世の中に櫻といふもの有ればこそ。其咲かぬ程は
五〇
早も咲けかしと心苛^た立ちて待たれ。さて其花の咲き出づれば、や
がても果敢なく散らむ事を思ひ。雨につけ風につけ。いと心
も痛むるなれ。されば此の世の中に絶えて櫻の無かりしならむに
は。心を痛むる事も無くして。中々に春の間の我が心は静かに長
閑けくあらましと云へるにて。裏には櫻花を御子に喩へて。皇子
を思ひ参らする真心のいと淺からぬをも含めたる也。此の歌う
ち見には櫻を憎みて詠めるが如くなれど。其真情は櫻を愛づるの
餘り。さまざまに心を痛むる事その極に達し。殆ど困じ果て、斯
くは云へるにて。即ち花を思ふの情いと深き也。さるを慈鎮法
師この歌を打ち返して『春の心のどけしとても何かせむ絶えて櫻の
無き世なりせば』と歌へるは。朝臣が櫻を憎みたる事とし。やがて
夫はば咎めしに似て。甚だ本歌の心に背けり。春海翁も既^は此の

事をあげつらひて。春の心は長閑けからましと云ひてこそ。心籠
りて味ひも深けれ。長閑けしとても何かせむと云ふ事は。花を愛
でむ人の心には。さは言ふにや及ぶべき。業平朝臣のは。定まり
たる常の理^{こと}の裏を云ひて。心の深き事を知らせたる物なるを。夫
を又打ち返して云ひては。たゞ常の理^{こと}となれば。何の味ひも無し
と云へり。洵に朝臣の歌の絶唱なるに引き反へて。慈鎮法師の詠
は其情無下に拙しと謂ふべし。

本歌

世のなかに絶えて櫻のなかりせば春のこゝろはのとけからまし

拾遺集

はるは猶ほ我にて知りぬ花さかりこゝろのどけき人はあらじな

風雅集

春のこゝろ長閑けしとても何かせん絶えて櫻の無き世なりせば

新拾遺集

身のうさもながむるからに忘られて春のこゝろぞ花にのどけき

續古今集

業平朝臣

壬生忠岑

前大僧正 慈鎮

入道二品親王

前内大臣衣笠

花見ても春のこゝろの長閑けさは老いて世に經る住居なりけり
續後撰集 藤原俊成
つらきかななどて樹のゝどかなる春のこゝろにならばざるらむ

三月晦日に雨の降りけるに。藤の花を人に遣はすとて

此の詞書、稿本に『三月晦日に藤の花を人に遣はすとて。雨降日』とあり。古寫本に據りて訂しぬ。

濡れつゝぞ強て折りつる年のうちに春は幾日もあらしと思へば

此の歌古今集に出でたり。一首の意は。此の藤の花の一と枝はいかで君に參らせむと思ひて。今日此の雨に濡れに濡れつゝも強て手折りし也。當年の内に春は幾日もあるにあらず。最早今日此

の一日より外には春は無しと思ふに依りて。降りしきる此の雨に濡るゝをも厭はず。強て手折りて進らする也との意にて。願はくは此の藤の花を。此の春の形見とも見做し給へなどの餘情を含めたる也。一首春を惜しむの情言外に溢れて哀れなる響きあり。借此の歌。古今集の一本に『濡れつゝぞ強て折りつる藤の花』とあるは後人のさかしらに改めしものにして取るに足らず。三句年の内にを斯く藤の花となさば『降る雨に濡れてぞ折りし』など。雨の事をも云はずしては一首の調へ整ひ難し。もと此の歌は。濡れつゝぞとのみ云ひて雨の事を云はず。折りつるとのみ云ひて藤の事を云はず。雨は其日現在に降る雨に任せ。藤は其日現在に贈れる藤に托し。斯くて其心情をのみ歌はれしにて。これ此の歌のいと味ふべき所なるを思ふべし。

人の許なる前裁の菊に結びつけ侍りける

前裁は庭前の栽込をいふ。此の詞書稿本に「人の許なる前裁に結びつけ侍りける」とありて、菊にの二字を脱せり。

うつし植るば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯めや

此の歌、大和物語に「在中將に後の宮二條后より菊めしければ奉りける序に」とあり。さて此の詠の初句、古今集に「うへしうへば」とありて、古來種々の説あり。眞淵翁は、業平朝臣集に「うつしうへば」とあり。また眞名伊勢物語にも「遷植者とあればうへしうへば」は「うつしうへば」の誤寫なるべしと云ひ。宣長翁は、植るし上はと説かれ。或人は植るし植るばと詞を重ねたる也と云ひ。又或人は宜し植るば也なども説けれど、眞淵翁の説こそ動き難けれ。

一首の意は、斯く遷し植る置きなば、秋と云ふ時の無き年なら

ば咲かぬ事もあるべけれど、年々に秋と云ふ時あらば、花の咲かざる事はあらじ。さて其咲きたる花こそは年々に散りもすれ。其根までが枯れ果むや、枯れ果はせじ。されば斯く一と度植る置きたる上は、千歳の後までも、秋毎には君が前裁に咲き匂はむかしと也。されども是は例の表面にのみ現はれし意にて、裏面の心は、花の咲くと云ふをば逢瀬の契に喩へ。花こそ散らめと云ひて逢瀬の契こそは絶ゆれと様に響かせ。根さへ枯れめやの根をば心の根本の事に通はし、枯れめやを離れめやに云ひ掛けたるにて、その大意は、一と度君と契をこめ置きし上からは、いかでか君をば思ひ絶ゆべき。心には只管に君に逢はむ事を願へども、彼の菊の花の秋なき年に遇ひて、咲かむとするに咲かれざるが如く、今は殿内の人目しげくして、逢ふに逢ひ難き境遇にあるを如何にせむ。然れども其逢瀬の契こそ絶え果もせめ。心の底まで契を絶つ事や

はあるべき。あはれ眞の心は長しへに君が身邊を離れじ。されば君も我が心をば疑はずして。また長しへに我をば思ひ給へかしと也。此の歌裏面に斯く巧みなる意あれども。古來一人も知る者なく。たゞ菊を贈るにつけての言の葉とのみ解き傳へしは口をしき限なり。朝臣にして若しさる心をのみ言はんとならば。如何ぞ『秋なき時や咲かざらむ』また『花こそ散らめ根さへ枯れめや』など。あやしく理がましき事のみをしも連らぬべき。はた其裏面に巧みなる此の心籠りたらずば。紀氏いかでかは此の歌を古今集の中には收めむ。思ふべし。さるにても此の歌。古來その裏の心を知る人無きまでに。巧みに菊の上に紛らはしつゝ、密事をば云ひ含めたる。あはれ歌聖の技こそ恐ろしけれ。

文月ばかり。女の許より

あき萩をいろどる風の吹きぬれば人のこゝろもうたがはれけり
と云ひおこせければ。かへし
秋はぎをいろどる風は吹きぬともこゝろはかれじ草葉ならねば

此の贈答の歌。後撰集に出でたり。○文月ばかりは。文月の頃と云ふに同じ。文月は七月にて秋の初の月也。此の詞書及び女の歌稿本に脱したり。古寫本に據て加へぬ。○秋萩を色どる風。秋になりぬれば自ら萩の花の薄紫に咲き出づるを。秋風が萩の花を色どり染むと様に面白く云へるなり。

一首の意は。昨日今日秋風の吹き出でしまゝに。萩の花の色めき初めしを見るにつけて。あはれ昨日今日わが思ふ人も。あだし

少女にさそはれて。そなたの風に色めきやせむと。いと御心の疑はるゝよとの意にて。一首なよびかに哀れ深し。此の歌の作者は大和物語に染殿の内侍とあり。

かへし歌の意は、きのふ今日秋風の吹き出でしまゝに。萩の花の色めき初めしにつけて。此の業平の心も其如く色めきはせずやと疑ひ給ふよしなれど。夫は甚じき過差の御心なり。假令あき風は暇なく吹くとも。此の業平は秋萩の如き。はかなき草葉にあらざれば。心の色の變はる謂れあるべからず。我が心はしも依然君の身邊を離るゝ事なく。常に君をのみ思ひ慕ひてありと也。心はかれしは。心は離れしにて。草葉の枯るゝに係れる縁語なり。此の一首。取り立てて珍らしき意の見えざるは。對手の歌の餘りに優になだらかにして。彼のあだなりと名にこそ立てれの詠の如く曲折を弄したる節なきに依り。朝臣も亦おのづから曲折を弄ぶに

よし無く。従て唯詞調をのみ麗しく飾られしなるべし。
題しらず

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

此の歌は古今集に『彌生の一曰ばかり。忍びに人に物を言ひて後に。雨の降りけるに詠みて遣はしける』とあり。即ち女と契りて後春の長雨に降り籠められて逢ひ難くなれるを啣ちて詠める歌なり。○起きもせず寝もせでば。起きて居るにても無く寝て居るにても無くとの意にて。現とも無く茫然としたる様なり。○春の物とては。俗に云は、春の持前なりと言ひて。との意なり。即ち長雨の降り續くは春の習ひぞかしと也。○ながめ暮らしつ。ながむと云ふ詞は。心に物思ひの有る時。默然として物を久しく打ち見つむるを云ふ。

此處なるは其物思ひに沈む意のながめに。長雨を兼ねたるなり。一首の意は。君を戀ひ慕ひて種々に物思ふ餘り。起きて居るとも無く寝て居るとも無く。たゞ茫然として夜を明しては。晝間に立ち到るを此の頃の常とし侍り。さて晝の間は。事に混れて物思ひの慰む方もあらむかと思ふに。晝も終日雨降り暮らしていと、鬱せく。かへりて物思ひの増さるのみなれば。あゝ爲んかたなし。心の晴るる隙なきも。雨の降り續くも。春には有勝ちの事なり。春の習ひぞかしと獨言ちて。雨を打ち見つめつゝ晝も亦茫然として暮らす事よと也。初一二の句は所謂朝臣が獨特の口ぶりにて。物思ひに堪へ難き夜半のさま言外に溢れたり。一首の調べ將た力ありてゆるび無く。明してはと言ひしに對へて。暮らしつと結びたるなど。いと、巧妙なりと謂ふべし。

本歌

業平朝臣

起きもせず寝もせず夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ
新後撰集 宗尊親王
小萩はら夜さむの露のおきもせず寝もせて鹿やつまを戀ふらむ
新千載集 前大納言公隆
起きもせず寝もせず床の上に夢ともなしの人のおもかけ
新撰古今 源 兼 實
ひとめのみ忍ぶの露のおきもせず寝もせぬ戀にみだれてぞふる
壬二集 從二位家隆
ながくはに明けだにはてれ起きもせず寝もせぬ夜半の村雨の空
拾遺愚草 藤原定家
秋くさの露わけごろもおきもせず寝もせぬ袖はほすひまもなし

龍田河に紅葉の流れたるかたに

龍田川は大和國平群郡を流る、川にて紅葉の名所也。大和志に。自廣瀨郡流經勢野至立野村西龜瀨入于河州蓋以立野爲漕運之津云々とあり○流れたるかたは。形にて即ち畫讃の歌なり。塙本に此の詞書なし。古寫本に據て加へつ。

ちはやぶる神代も聞かずたつた川からくれなるに水くゝるとは

此の歌古今集に出でたり○ちはやぶるは、逸速振の約也。逸は稜と音通ひて。勢の猛々しきを云ふ詞なるより。神また人に掛くる枕詞とせり。又その神に掛くるより轉じて金。加茂に掛け。尙ほ稜威と宇治と通音なるに依て宇治にも掛けて云へり○から紅に水くゝるとはは。龍田川の水を紅花の纈纈になすとはの意なり。纈纈といふは。絹布を括りよせて染むるより名づけしにて。今の世のしほり染に同じ。此の詞くゝると濁りて訓むべからず。から紅は韓紅にて。古へは何物によらず。韓土より渡來せし物は珍らかなりしが故に『から何』といふ習慣語あり。から櫃。から匣。から錦。から衣。から藍などいと多し。

一首の意は。此の龍田川に紅葉の流るゝ状を見るに。紅花鹿の子。紅花しほりの如く。いと美麗なる事よ。神代には奇しく珍らしき事のみ多かりし事を聞けど。その神代にも斯く川水を紅の括り染にせし事は。その例を聞かず。倍も奇しく珍らしき事なる哉との意にて。川水に紅葉の流れたる状を。括り染に見立て、云へるなり。一首の思想いと奇しくいと珍らかなる。是も亦神代も聞かずとや評すべからむ。

本歌

ちはやぶる神代も聞かずたつた田河からくれなるに水くゝるとは

新勅撰集

秋は今日くれなぬくゝるたつた川ゆくせの波もいろかはるらむ

新後撰集

たつた川くれなぬくゝるあきの水いろもながれの袖のほかへは

續千載集

たつたがは氷のうへにかけけてけり神代も聞かぬゆきのしらゆふ

新千載集

後光明寺入道前攝政左大臣 津守國冬 前大納言爲氏

たつた山をのへの松の木の間よりみどりなくる秋のみみぢ葉
新千載集 式子内親王
 かみなづき三室のやまの山おろしにくれなぬくる龍田河なみ
月清集 攝政太政大臣
 これもまた神代は聞かすたつた河つきのこほりに水くいるとは
 あき風のたつた山よりおろしきてもみぢの河をくいるしらなみ
壬二集 藤原家隆
 龍田やま神代もあきの木の間よりくれなぬくる月やいでけむ
拾遺愚草 藤原定家
 たつたがは岩根のつゝじかげ見えて猶ほ水くいる春のくれなぬ
 ゆふぐれば山かぜすゞし龍田がほみどりのかげなくいるしら波
 たつた姫てぞめの露のくれなぬに神代も聞かぬみれのいるかな
拾遺員外 藤原定家
 立田がは神代も聞かすたつた河つきのこほりに水くいるとは
 年久しくいひ渡りける人のつれなく侍りければ
 たのめつゝ逢はで年経るいつはりにはこりぬ心をひと
 は知らなむ

かへし。女
 夏むしの知る知るまどふ思ひをばこりぬかなしと誰
 か見ざらむ
 たのめつゝの歌。古今集には其作者「躬恒」と見え。後撰集には假
 名にて「なりひらの朝臣」と記され。返し歌なる夏虫の云々の歌の作
 者は「伊勢」とあり。また伊勢が家集に此の贈答の二首ありて。夏虫
 のゝ歌は伊勢自身の作。頼めつゝの歌は。枇杷左大臣仲平の作と
 見ゆ。仲平朝臣の伊勢に通はれし事は世に隠れなければ。按ふに
 此の歌は仲平朝臣の作なるべし。されば後撰集に「なりひらの朝臣」
 とあるは「なりひらの朝臣」の寫誤りならむ。茲にまた仲平朝臣は躬
 恒と同時代の人なるに。古今集に躬恒が歌として入れるは如何な
 る事にか。そはとまれ業平朝臣と伊勢とは。聊か時代に相違あれ
 ば。かゝる贈答あるべくもあらず。將た此の歌の風姿よりして推

量るも。在中將の歌ならぬ事は亮かなり。序論にも既に云へる如く。古寫本には此の贈答の二首見えざるが。是ぞ古への儘なる正しき集にて。稿本に此の贈答の入りたるは。其名を誤寫せる後撰集に據りて。後人のさかしらに加へしものなるべし。

右近の馬場うまばの手つがひ見侍る。むかひに立てたる車の下簾より。はつかに女の顔の見えければ遣はしける

右近の馬場の手つがひ見侍る。拾芥抄に。五月五日左近府騎射六日右近府騎射とあり。猶ほ同書に右近馬場は一條京極の末にありと見ゆ。夫より東の方に離れて左近馬場あり。手番てがまは騎射に云ふ詞にて。近衛の騎手の其當日の立合の稱なり。されば手つがひ見はべるとは即ち五月六日の右近の馬場の騎射をば。業平朝臣の

見物し居たりしなり○向ひに立てたる車の云々。是も亦その手番を見に来れる女にて。朝臣の對ひに車をば立て置きて。車の簾越しに見物するさま也。されば其女の顔の。下簾の隙よりほのかに見えたる也。大鏡に二條の後の御事を書き連ねて。見もせぬ人の戀しきはなど申す事も此の御なからひのほどこそ承はれ云々と見えれば。此の女と云へるは二條の後の御事なるべし。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や
眺め暮ながさむ

見ずもあらず見もせぬ人。見ざるにもあらず見しにもあらず人といふ意にて。それとはわかねど。下簾の隙よりはつかに見えし意なり○あやなくば。無文むぶんにて。條理の立たぬ事を云ふ。俗に取ら止めも無しと云ふ意なり○ながめ暮らさむ。ながめば物思ひに沈む意の詞なる事既に云へり。

一首の意は。聊かも見すと云ふにても無けれど。さればとて見たりと云ふにても無く。確かに夫と見定めもせぬ人のあやしくも戀しく思はるゝ事の果敢なさよ。物を思ふ事は。何事か其理由ありて始めて物も思はるゝ事なるが。斯く見ないでも無く見たでもなしと云ふ如き捉へ所の無き人の戀しくあるなれば。取り止めも無く理由も無き物思ひをなして。今日の一日は暮らさるゝ事ならむ。借もあやしき我が心やとの意なり。初二の句。見ずもあらず見もせぬ人のと云へるは。彼の起きもせず寝もせでの口調に同じく。朝臣獨特の口ぶりにして。面白き奇句と謂ふべく。上をば斯く夢の如く打出でしにつけて。あやなく今日や眺め暮らさむと。又夢の如くとぞめしも巧みなり。此の歌また古今集に出で、次に女の返し歌あり。知る知らぬ何かあやなく別きていはむ思ひのみこそしるべなりけれ。讀人知らずと見ゆ。

本歌

業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や眺め暮さむ

續千載集

前大納言爲氏

見ずもあらず見もせぬ影のなかに空にあやなくかすむ春の夜の月

續千載集

今出河院近衛

見ずもあらで覺めにし夢の別よりあやなくとまる人のおもかげ

新千載集

藤原盛徳

水草のる野守のかみ見ずもあらず見もせぬ戀に満るゝ袖かな

新續古今

按察使公保

あやなくや雲にまがへむ見ずもあらず見もせぬ花に山路暮しつ

風雅集

藤原定家

きのふけふくものはたに眺むとて見もせぬ人の思ひやは知る

賴政集

源三位賴政

逢ひもせず逢はずしもあらぬ今日やさは事あり顔に詠め暮さむ

ある女のもとに。人の遣はしける

つれづれのながめにまさる涙がは袖のみ濡れて逢ふ

よしもなし

七〇

此の歌古今集に『業平、朝臣の家に侍りける女の許に詠みて遣はしける。藤原敏行朝臣』とあり。業平朝臣の家に侍りける女といふは、後に敏行朝臣の室となりし人なる。在中將の妻君の妹を謂ふ歟。敏行朝臣は藤原富子麿の子。母は紀名虎の第三女にして。惟喬親王の御母更衣静子の妹なり。晩年從四位上左近衛權中將となり。能書の聞え高く。歌は在中將に次ぎての上手と稱せらる。元日に二條の後の宮にて白き大袷おほうちすを賜はりて。降る雪のみのしろ衣うちきつ、春きにけりと驚おどろかれぬるの一首は後撰集の巻頭に撰ばれ。秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる今古住の江の岸による波よるさへや夢の通路人めよくらむ今古など。名歌甚だ多し。拾芥抄に延喜七年に卒せられたるよし見ゆれど行年は詳かならず。さて此の歌の初句つれづれは徒然つれづれにて。無聊な

るをいひ。ながめには。長雨に物思ひの『ながめ』を兼ねたる也。

一首の意は。長雨降りつゞきて。いとゞ徒然なるまゝに。君を思ふ物思ひの甚しく増りて。涙は川の如くに流るれども。たゞ徒らに袖を濡らすのみにして。君に逢はむよしも無き事よと也。古來思ふ人に逢ふ事をば。川を渉るに喩ふる例ある事にて。降り續く長雨に我が涙川の水かさ増りて。渉らむとするにも袖を濡らすのみにて渉る事を得ずとの綾をも含めたり。

かへし。女にかはりて

あさみこそ袖はひづらめ涙がは身さへながると聞かばたのまむ

かへし。女にかはりては。即ち前の歌の返歌をば。女に代りて朝臣の詠みたる也。淺みこそその『み』は。山高み。水清み。などの

七一

『み』に同じく、浅き故にこそその意なり○袖はひづらめ。ひづは濡ると云ふに同じ。

七二

一首の意は。君が涙川の水かさ増りて涉らむとするにも袖を濡らすのみにて甲斐なきよしに宣へども。思へば君の涙川は甚だ浅きやう也。夫を如何にと云ふに。浅き故にこそ袖を濡らすなれ。深からば中々に袖を濡らす程の事にては止まじ。我を思ひ給ふ心深くおはさば。自然涙も瀧の如く降りて。涙川の水もいと深かるべきに。然らぬは我を思ひ給ふの情浅きにて。頼み難き御心なり。されば。たゞ袖が濡るゝ程の事に停まらずして。その身體さへ押流さるゝよと仰ある程の涙川の深さならば。君が心を頼みて逢ひ参らせむとなり。彼の涙川袖のみ濡れてと云へるに答へて。浅みこそ袖はひづらめと巧みに是を反駁し。斯くて下の句に身さへ流ると聞かば頼まむと面白くも對手を翻弄したる。その技その

妙なに物にかたとへむ。朝臣は特に返歌に妙を得られたりと基俊卿が嘆賞せしも亦宜なりと謂ふべし。

本歌

業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙がは身さへながると聞かばたのまむ

續古今集

新院辨内侍

なやま田にまかする水のあさみこそ袖はひづらめ早苗とるとて

續千載集

萬秋門院少將

わたりえぬ涙のかほの瀬を早み身さへながるといかに知らせむ

玉葉集

後堀河院民部卿典侍

よしさらば涙の下に朽ちもせよ身さへながるとこのまむしる

新千載集

前参議實榮

いたづらに身さへ流るゝなみだ川あふ瀬やなほも頼みなるらむ

源氏物語

玉葛の巻

はつせ川はやくの事は知られども今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ

ありきいたくすとて。女のいたく云ひ侍りて

七三

大ぬさのひく手あまたになりぬれば思へどえこそ頼
まざりけれ

七四

ありきいたくすとては。歩き甚く爲にて。在中將の。所定めず
種々なる女の許へ通ふを云ふ。女のいたく云ひ侍りては。夫をば
女の甚く怨じてといふ意なり。○大ぬさの引く手あまた。大ぬさは
六月の潔身祓の時。陰陽師の持つ串に挿したるしでの事にて。御
幣の一種なり。陰陽師祓へ終れば。人皆その大ぬさを取りて其身
を撫で潔め。斯くて後川へ流し捨つるなり。されば大幣は衆人の
手に觸るゝ物なるが故に。引く手あまたとは續けたる也。

一首の意は。六月祓の折人々の争ひて手に取り寄する大幣の如
く近き頃は君の袖引く人のいと多くなりぬるほどに。君は其人
々の許へ所定めず行き通ひて。御心も定まらずなり給ひし様なり。
されば妾は心に君を思ひはすれども。君を頼みにはなし侍らずな

りぬと也。

かへし

おほぬさと名にこそ立てれ流れても遂による瀬はあ
りてふ物を

此の贈答の二首ともに古今集に出でたり。○大ぬさと名にこそ立
てれば。大ぬさはわだなる物也と名にこそ立てれと言ふべきを。

例の獨特の口調にて巧みに此の詞を省き。對手の歌に托して是を
餘情に響かせたる也。○よる瀬。此の瀬は。嬉しき瀬。苦瀬。逢瀬。
啼かずとも此處を瀬にせん郭公山田の原の杉の村立(西行法師)など
の瀬に同じく。總て物の際界の意也と守部翁は云へり。茲なるは
即ち寄り着く場所の意にて。河の瀬にかけて云へるなり。
一首の意は。大幣といふ物はしも。潔身する人々の手より手に

七五

傳はりて、果は水のまに〜流れ漂ふにより、いと頼み難くあ
だなる物也との評をば君は負ふせられたも。あはれその大幣の。
水のまに〜漂ひても。末遂に流れ着く瀬はある物を。何か引く
手数多にして頼み無きものとのみなし侍らむや。されば此の業平
が。近き頃所々にさすらふとて。うちつけに頼み無きものに思ひ
給ふべき事にはあらず。此の業平とて末遂に寄瀬となす所いかで
無からむ。さて其の途の寄瀬とする所は。君を置きて誰とかすべ
き。君の外にはあらしとの餘情を含めたるなり。彼の對手の人。
朝臣を大幣に喩へて云けるより。朝臣また自身をば大幣に喩へて。
流れても遂に寄瀬はありと云へるは。珍らしくも思ひよられける
ものか。殊に獨特の口調を以て巧みに言葉を略かれし事の妙へな
る。ありてふ物をと詞を残して。餘情を含められたる微妙さは。
此の歌の途の寄る瀬とも謂つべく。その調べのいとなだらかなる

は、水のまに〜大幣の流るゝ様にも似たりとや謂はまし。

本歌

業平朝臣

おほねさと名にこそ立てれ流れても途による瀬はありてふ物を

續古今集

中納言

たつた川もみぢ流れて行くあきの途による瀬やいづくなるらむ

新千載集

前大納言爲定

みたらしやみそぎに流す大ぬさの途による瀬はあきかぜぞ吹く

新續古今

寂身法師

みそぎする我がな川の大ぬさは途による瀬や逢ふ瀬なるらむ

新續古今

侍従爲敦

みそぎをば如何にうけむ大ぬさのよる瀬も知らぬ身の契かな

續後拾遺

藤原爲秋

流れてもいまぞ知らるゝ大ぬさのよる瀬は神のこゝろなりけり

六帖

わだつみのおきのしほせに流れても人のよる瀬はありてふ物を

五條の^{うき}後の宮の。西の^{たい}對の西のつまに住む人に。

忍びて物いひ渡りけるを。正月十日ばかりに。梅の花ざかりに語らひける人の。行方も知らず音もせず成にければ。またの年の梅の花ざかりに。彼の對に罷りて。二十日の月の傾くまで。あばらなる板じきに侍りて。

七八

五條の後の宮は。閑院左大臣冬嗣公の御女にて。御名は順子と聞ゆ。二條の後の御叔母君に當れり。西の對の西のつまに住む人の對の屋の西の局に住む人といふ意なり。大鏡五條の後の御事を記せる條に。伊勢物語に業平中將の。宵々ごとに打ちも寝なむ。と詠み給ひたるは。此の宮の様に候める。如何なる事にか。二條の後に通ひ申されける間の事とぞ承り及ぶ也。春や昔のなども。五條の後の御家と侍るは。わかぬ御中にて其宮に養はれ給へ

れば。同じ處におはしけるにや。と見えれば。此の西の對に住む人といふは。二條の後の未だ世籠りておはし、折の事なるべし。あばらなる板じき。荒れたる板敷の意なり。あばらをあらはの意にとりて。戸障子など立て廻らさぬを云ふといへる説は悪し。あばらは物の荒れたるに云ふ詞なる事。今も荒屋をあばら家と云ふにて知るべし。是は契りし人の栖まらずなりしより。其室の板敷などいと荒れたる状なり。

詞書の大意は。五條の後の御家の西の對に住む人に。梅の花盛なりし時忍びに契り語らひしが。其日より幾程もなき正月の十日許に。彼の梅の花盛の時に契りし人の行方も知らず音もせずなりにしが。その次の年の梅の花盛に。去年契りし彼の西の對に行きて。廿日の月の傾く迄去りやらず。獨あれたる椽に座して。去年の春を忍びつゝ詠めると也。

七九

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

八〇

此の歌古今集に出でたり○月やあらぬは。次句に春や昔の春ならぬと云へる如く。月や昔の月ならぬ。と云ふべきを例の獨特の口調を綾なして巧みに言ひ省かれしにて。月は昔の月ならぬにやとの意なり(月やあらぬ春や昔の春ならぬの『や』は。共に反語の『やは』の意也と云へる説ありて。今世の學者みな此の説に従へども。是は極めたる僻事なり。委しくは後に説くべし。)

一首の意は。去年の春。此の所にて見し月はいと楽しかりしを。今日此處にして見る月は。去年に似るべくもあらずして。いと哀れに。いと悲しく覺ゆる事よ。あはれ今日此處にして見る月の。斯く去年の春の如く楽しく覺えざるは。月が昔の儘の月ならぬ故か。將また月は昔の儘の月なれども。春が昔の儘の春な

らぬ故か。さるにてもあはれ我が身は。去年に變りたる事なき身にてあり乍ら。今日此の月を見るに。去年とは甚く異りて。其影の哀れに悲しく覺ゆる事のいぶかしさよ。懐ふに是は。月が去年の月とは異なるか。將また春が去年の春とは異なる歟。此の兩者の中の何れかに依るならむとの意なり。此の歌。去年契り語らひし人の不在なりしなれば。朝臣の心の物淋しく物悲しきは固よりにして。實は其境遇の去年とは全く異なる身なるを。更にも異なる所なきが如くに言ひ做し。契りし人の見えずなりし事をば露だにも言はずして。かへりて年々に變るまじき月。年毎に異なるまじき春を捉へて。儂なくも之を疑ひたる。あはれなる響き。いと一言外に溢れたり。殊に春や昔の春ならぬと。同語を重ねて調べを強め。我が身ひとつは舊の身にしてと。更に同語を重ねて弛びなく是をとぢめ。言ふに言はれず説くに説き難き餘情を含められたる。

八一

巧妙もまた茲に到りて極まれりと謂ふべし。

本居宣長翁は、此の歌の、月やあらぬの『や』春や昔の春ならぬの『や』は、共に反語にして『やは』の心なりと云ひ、一首の意を、月やは昔の月ならぬ。月は昔の儘の月なり。春やは昔の春ならぬ。春も昔の儘の春なり。然るに我身一つのみは昔の儘の身にて在り乍ら。昔の様にもあらぬ事よと云ふ意なりと説かれ。今世の學者みな此の説に従へども是はいとしく誤まれる説なり。そもく、月やあらぬ春や云々の『や』は、反語の『やは』の心にあらず。

古今集

詠人知らず

夢にだに逢ふ事かたくなり行くは我やいを寝ぬ君やわする。

藤原言直

春や疾き花や遅きと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるいな

千載集

俊恵法師

君やあらぬ我が身やあらぬおぼつかな頼めし事の昔かほりぬる

などの『や』に同じく、指して疑ふ意を含める係詞なり。今此の例歌よりして説き起さむに、我やいを寝ぬ云々は、我が寝ぬ故か。將また我は寝れども君の我をば忘るゝ故かの意。春や疾き云々は、春の來様が例年よりも早きにや。將また春の來様は普通なれども、花の咲き様が遅きにやの意。君やあらぬ云々は、君は舊の君にてはあらぬにや。將また君は舊の儘の君なれども、我身が舊の我身にてはあらぬにやとの意なり。されば月やあらぬ春や昔の春ならぬは、月が昔の儘の月ならぬにや。將また月は昔の儘の月なれども、春が昔の儘の春ならぬにや、との意なる事を知るべし。

尙ほ宣長翁の説の如く、月やあらぬの『や』を反語の『やは』の意とする時は、朝臣の歌より化出でし幾その歌どもは、その意さらに聞えざるをいかにせむ。今其一二を擧げて解き試みむに、

身の憂さに月やあらぬと眺むれば昔ながらの影の洩り來る(新古今)

老いぬれば月やあらぬと思ふまで舊見しよりも霞む影かな(新千載)

此の兩首をば。假に宣長翁の説に従ひて解かば「身の愛さに」の歌は。大空の月に對ふまゝに。そゝる我身の愛けく悲しく覺ゆるが故に。月やは昔の月ならぬ。昔の儘の月なりと眺むれば。昔の儘の影の洩り來るよと解き。また「老いぬれば」の歌は。年老いぬれば眼もいと曇り増りて。大空に輝き渡る月を見るにも。昔の儘の月なりと思はるゝ迄。昔見し時の月よりも影が霞みて見ゆ。と様に解かざるべからず。斯くては兩首共に何の事にか更にも其意を得がたし。然るに是を。大空の月に對ふまゝに。いとゞ我身の愛けく悲しく覺ゆるが故に。あはれ今見る月は。昔の月とは異なるにかと思ひ疑ひて能く眺むれば。疑ひしは非ずして。依然昔の儘の影の洩り來るを認めしよと解き。年老いぬれば。眼もいと曇りまさりて。大空に照る月を見るにも。今見る月は昔の儘の月にて

はあらざるにやと疑はるゝまで。昔見し時の月よりも影が霞みて見ゆる哉と解かば。事もなく聞ゆるを思ふべし。

本歌

業平朝臣

月やあらぬ春やむかし春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

新古今集

二條院讃岐

身のうさに月やあらぬと眺むればむかしながらの影の洩り來る

新古今集

清原深養父

むかし見し春はむかしの春ながら我身一つのあらすもあるかな

新古今集

右衛門督通具

梅のはな誰が袖ふれしにほひぞと春やむかしのつきに間はな

新古今集

藤原俊成ノ女

おもかげの霞める月ぞやどりけるはるやむかしの袖のなみだに

續後撰集

源俊平

月かげにむかしの春をおもひ出で、我身ひとつと誰ながむらむ

續後撰集

藤原俊成ノ女

ながむれば我身ひとつのあらぬ世にむかしに似たる春の夜の月

續古今集

太上天皇

何とかは月やあらぬとたどるべき我がもとの身を思ひ知りなば

續古今集

民部卿長家

はなの香の匂ふにものゝ悲しきは春やむかしのかたみなるらむ

續拾遺集

前内大臣

いそのかみふる野の澤のあとしめて春やむかしと若菜つみつ

續拾遺集

前攝政左大臣

月見ても秋やむかしと忍ばれてもとの身ながらみこそつらけれ

新後撰集

源時清

なみだにぞ又どしつる春のつきうきは變らぬもとの身にして

玉葉集

從三位爲子

われのみぞもとの身にして戀ひ忍ぶ見しおも影はあらぬ夜の月

續千載集

道洪法師

かすむ夜の月はむかしの春ながらもとの身ならぬ墨ぞめのそで

續後拾遺

前大納言爲世

老が身の春やむかしの友と見むかすみなはてそ夜半のつきかけ

風雅集

前大僧正 範憲

世々經ても飽かぬ色香はのこりけり春やむかしのやどの梅が枝

新千載集

向阿法師

めぐり逢ふ春やむかしの身と月だに知らじ墨ぞめのそで

新千載集

藤原俊成ノ女

ふるさとなりにしがども柳咲く春やむかしの志賀のはなぞの

新千載集

後光明寺入道前攝政左大臣

おもひ出で、月やあらぬと眺むればなみだぞ霞むふるさとの空

新千載集

祝部成國

老いぬれば月やあらぬと思ふまでもと見しよりも霞むかけかな

新後拾遺

前中納言定宗

老いぬれば我からかすむ春の夜を月やあらぬとなにかこつらむ

新續古今

源持之

逢ふと見る夢やむかしの夢ならぬ憂き一人寝はもとの身にして

新續古今

源詮信

かこたじな春やむかしの夜半の月わが身ひとつにかすむ影かは

新業集

冷泉入道前右大臣

さても身の春やむかしかはるらむありしにもあらず霞む影哉

新葉集

八八

権中納言經高

新葉集

後村上院

拾玉集

大僧正慈鑑

風やあらぬ月もやあらぬ物おもふ我身ひとつのあきのゆふぐれ
春の夢のさむるなみだのそでの上に月やあらぬと問ふ人もなし

拾遺愚草

藤原定家

あきを経てむかしは遠きおほぞらに我身ひとつの月のかけ

宮づかへしける人を久しく罷らで。むかひにまう
づれど。とみにも出でざりければ。

よひの間にはや慰めよいそのかみふりにし床もうち
はらふべく

此の歌。後撰集(戀歌三)に。宮づかへし侍りける女。程久しくあ

りて物いはむといひけるに。遅く罷りければ。な^かひ^らの^朝臣^(一)
本に業平朝臣と見え。次に伊勢の返歌。『わだつみと荒れにし床を
今更に拂は^は袖や泡とうきなむ』といふ歌出でたり。また伊勢が家
集には。御息所なやませ給ふ頃。紀伊藏人といひて。此の始の男
あり云々と詞書して。わだつみと荒れにし床をの歌あり。袋草紙
に。此の御息所といふは七條の後の御事也。また始の男と云へる
は仲平朝臣の事也と見ゆ。されば宵の間にの歌は。仲平朝臣の作
なる事いと明かなり。さて此の歌の古寫本に見えずして。塙本に
出でたるは『なりひら』を『なりひら』と寫し誤れる後撰集によりて。
後人の書き加へしなるべし。

伊勢と云ふ女に

伊勢の海に遊ぶ海人ともなりてしが浪かき分てみる
めかづかむ

此の歌。後撰集(戀歌五)に。なりひらの朝臣として出で。伊勢の返歌「おぼろけの海人やはかづく伊勢の海の浪高き浦に生ふるみるめを」といふ歌を次に据ゑたり。されど此のなりひら朝臣とあるは例のなりひらを寫し誤りし也。是は北村季吟の八代集抄に。證本を引きて。伊勢の海の歌は仲平朝臣の歌なりと記されたるに據りて愈々明か也。よしやさる證本はあらずとも。業平朝臣と伊勢とは其時代稍異れば。其間に贈答の歌などあるべくもあらず「頼めつ逢はで年経る偽にこりぬ心を人は知らなむの歌につきて云るを参照すべし」此の歌も塙本にありて古寫本に無し。

惟喬の御子。狩しに罷りしに。天の河といふ所にて。その心をいひてかはらけは取れといへば。

惟喬の御子の御事は序論に云へり○天の河は。河内國交野原に在り。河内志に「天河」源出和州南田原星杜經石船溪至私市與衆澗

水合。經茄子作至禁野入淀河自源至此。溪幽水清。風景奇絶云々とあり。交野原は當時御狩場にて。私人の禽獸を驅る事を禁せられしに依り禁野とも云へり。惟喬親王即ち此處に鷹狩し給ひて。天の河の河畔に出で給ひし也。斯くて其河邊にて酒宴の筵を開き給ひしよし。古今集。伊勢物語等に見ゆ○其ころを言ひてかはらけは取れ云々は。狩して天の河に來れりと云ふ心を歌に詠みて。さて後。盃をば取れと御子の仰せられしと也。

かりくらししたなばたつめに宿からむ天のがはらに我は來にけり

かりくらしは。狩に日を暮らしの意なり○たなばたつめ。天上の天の河には棚機津女と云ふ女住みて。毎年七月七日の夕べに彦星と逢瀬を契るよしの故事あり。即ち此の歌は。交野原なる天の河をば。天上の天の河に倣して詠める也。

一首の意は、鷹狩の面白さに、我を忘れてあくがれ歩きつゝありし程に、圖らざりき天の河の邊に來らむとは、傳へ聞く天の河原には、柵機津女といふ美女の栖む宿ありとぞ。いざゝらば最早この地を離れずして、此の儘此處に狩り暮らしつゝ、暮れなばやがて柵機津女に、一夜の宿を借らばやと也。此の歌もとより趣きの面白きが上に、陽氣なる響きを含める阿韻の、三十一字の大半を占めたるがかりくらししたなはたつめにやとからむまのかはらにわれはきにけり自ら陽氣なる歌の心に打ち合ひて、更に面白く浮き立ちて聞ゆ。また清少納言が枕の草紙には、よしの河、天の河この下にも在るなり。柵機津女に宿からむと業平が詠みけむもましてをかし、など見えたり。

かへし歌。えし給はざりければ。御供なりける紀の有常といひける人。

ひとゝせにひとたび來ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへし歌云々は、狩暮らし柵機津女にの歌をば。惟喬の御子御覽じ給ひて、御威の餘り返歌もえなし給はざりし也。惟喬親王は、古今集を始め代々の集にも秀歌あまた出で、中々の御歌口なるに、返歌にふと口づまり給ふ迄御威ありし様なるに依るも、彼の歌の秀絶なる事を知るに足るべし。さて惟喬の御子その返歌を遊ばさゞりしかば、御供なる紀の有常といふ人。御子に代りて詠みたりと也。○紀有常朝臣は、左京大夫正四位下紀名虎の子にして、惟喬親王の御母静子更衣の兄君なり。承和十一年正月右兵衛大尉となり。嘉祥三年左近將監に任せられ。四年藏人に補せられ近江權大掾を兼ね。仁壽元年左馬助を兼ね。尋で從五位下に叙せられ。二年但馬介を兼ね。三年更に讃岐介を兼ね。左近衛に轉じ。齊衡

二年從五位上に叙せられ。左近衛少將となり。天安元年少納言を兼ぬ。二年更に肥後權守を兼ぬ。貞觀七年刑部權大輔に任ぜられ。九年下野權守となり。十五年正五位下に叙せられ。十七年雅樂頭に進み。十八年正月從四位下に叙せられ。元慶元年正月廿三日六十三歳にして卒しぬ。此の朝臣また歌を以て聞ゆ。

一首の意は。御身は柳機津女に宿を借らむと宣へども。由來柳機津女は。一年に一度逢ひに来る彦星と云ふ君をのみ待ちて。操を立て通す姫君なれば。御身が其宿を訪れて。一夜の宿りを借し給へと宣ふとも。姫は宿りを貸す事あるまじとの意にて。彦星をば君と云ひ。織女をば宿かす人と。面白く云ひ連ねたるなり。狩暮らしの歌及び此の返歌。ともに古今集に出でたり。

むかし。五條わたりに。忍びて人をかたらひけり。
忍びたる所なりければ。門よりはえ入らで。築泥

の崩れより通ひけるを。あるじ聞きつけて。彼の
道に人を据ゑて守らせければ。え逢はでのみ歸り
て遣はしける。

五條わたりは。五條の後の御家にての事なるを。書き紛らはしたる也。○忍びて人を語らひけりは。彼の西の對の西のつまに住む人に通はれしなるべし。月やあらぬの歌の詞書を参照すべし。○忍びたる所は。公然通ふべからぬ處の意なり。○築泥の崩れは。土を以て築ける牆の崩れたる處を云ふ。枕草紙に人にあなづらるゝ物ついで崩れと云ふ事見えたり。○あるじ聞きつけて云々。主と云ふは五條の後の御事なるべし。築泥の崩れを通路とせしに。主の人其處に番人を置きて守らせしかば。通ひ難くなりぬとなり。

ひと知れぬ我が通ひ路の關守はよひ／＼ごとくにうち

も寝なむ

ひと知れぬは。人に知られぬと云ふべきを省略したる歌詞なり。○關守。築泥の崩れの番人を指したる也。○うちも寝なむは。寝て仕舞へよかしの意なり。うちもと云ふは。田子の浦ゆうち出で、見ればなどのうちに同じく。動詞の上に軽く添ふる『うち』と云ふ詞に。もと云ふ助辭の又軽く添はりたるにて。別に意あるにわらず。また寝なむのなは。過去の助動詞の『ぬ』の變化なり。

一首の意は。彼の築泥の崩れたる所は。人に知られぬ我が通ひ路なれば。その關所の番人の寝て仕舞はむ。外には誰知る人も無く答むべき人もあらざらむ。あはれ唯願はくは。彼の關守は宵々ごとに寝て仕舞へよかし。さらば思ふ人にも逢はれむ物をと也。築泥の崩れの番人など。無下に與なき者を捉へて。我が通ひ路の關守と優美につけられたるは巧みなりと謂ふべく。宵々ごとに

うちも寝なむと。わざと幼く云へるにおのづから哀れなる響き籠れり。此の歌また古今集に出でたり。

本歌

業平朝臣

ひと知れぬ我が通ひ路の關守はよひくことのうちも寝なむ

續拾遺集

典侍親子朝臣

誰が通ふみちの關とかなりぬらむよひくことに積るしらゆき

續千載集

後二條院

關守はあかつきばかりうちも寝よ我が通ひ路をしのぶばかりに

續千載集

讀人しらす

おもひやるこゝろばかりの通ひ路はよひよひことの關守もなし

續後拾遺

藤原基任

みやこおもふ旅寢の夢の關守はよひくことのおらしなりけり

新千載集

津守國道

こゝろあらば須磨の關守うちも寝じよひよひことの秋の月かげ

新千載集

清懷公

戀しき人には言はでひと知れずよひよひことに思ひつるかな

新千載集

九八

前大納言良冬

うちも寝ぬ我が通ひ路のせき守はたゞうき人のこゝるなりけり

新千載集

淨妙寺左大臣

おのづから人めを忍ふ通ひ路やよひよひことのゆめのうきはし

新後拾遺

寂身法師

せき守もうち寝る宵の通ひ路はゆるさぬなかと言はねばかりぞ

新撰古今

藤原爲季

よひよひの我が通ひ路をへだつとも更けてはゆるす關守もがな

新業集

師成親王

宵よひに行きてぞかへる關守のうち寝るほどのひましなれば

ある人

君や來し我や行きけむおもほえず夢かうつゝか寝てか覺めてか

君や來し我や行きけむ。君や及び我やの『や』文字は。月やあらぬ

春や昔の春ならぬのやに同じく。指して疑ふ意を含める係詞なり。即ち君が來給ひしにや。將また君が來給ひしにはあらずして。我が行きしにやとの意なり。

一首の意は。昨夜君と逢ひ見しが如くに覺ゆれど。君が我が方へ來給ひしにや。わらはが君の許へ行きしにや。更に思ひ出でられ侍らず。あな覺束な。君と逢ひ見しやうに覺ゆるは。そも夢なる歟。はた現なるか。寢て居りし間の事歟。覺めて居りし中の事歟との意にて。夢の如くなりけむ夜半の契をば。いと、僕むの心情言外に溢れて哀れ深し。

かへし

かさくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世ひとさだめよ

此の贈答。古今集に出でたり○かきくらすは。掻き暗す也。暗は暮に同じ。夜を明し日を暮すと云ふも。夜を明くし日を暗くすの義なるを思ふべし。然るに是を『掻き曇らす』也と先達の説けるものあるは甚じき僻事なり。

一首の意は。我も昨夜君と逢見し如く思へども。其折しも種々の思ひに我と我が心を暗くなして。心の中闇夜の如くなりしかば。君が來給へるにや。我が行けるにや。將た夢なるか現なるか。我も亦おもひわかざりき。されば其夢なりし歎うつゝなりし歎は。當時何事も無くて心の亂れてあらざりし世人こそ知らぬ。あはれ世の人よ是を定めよかし。さらば我も其夜の事を問ひ定めむにとの意なり。一首。ものゝ暗くなれば闇になるより心の闇と云ひ。闇には道など惑ふ物なれば。惑ひにきと續けたる。例の弛びなし。また末句に世人さだめよと幼なく云へるも面白く。いまだ心の闇

の明けやらぬ様さへ籠りて哀れなる餘情を含めり。

本 歌

業 平 朝 臣

掻きくらすこゝろの闇にまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

新勅撰集

植大納言實國

うつゝとも夢とも誰かさだむべき世人も知らぬ今朝のわかれば

續古今集

前大納言基良

生きてかく君につかふる老が身をたぐひなしとは世人さだめよ

題知らず

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成りまさるかな

此の歌。古今集に出でたり○寝ぬる夜の夢。昨夜逢ひ見し折のいとゞ儂なくて夢の如くなりし事を。寝ぬる夜の夢とは言へるにて。例の面白き言廻し也○いや儂なにもは。愈々はかなくもの意

なり。

一首の意は、昨夜の契は餘りに儂おろくして夢の如くなりし故、せめて今少し儂おろなからぬ契をば。眞の夢になりとも見ばやと思ひて眠りて見たれど。思ふ如く其夢に見る事能はざりき。あはれ現在に逢ひ見しだにも。儂おろなくて夢の如くに思はれし契の。今また儂おろなき夢にさへも見る事を得ずなれるに。愈々心の中に儂おろなくもなり増りぬる事かなと也。彼の逢ひ見し折の夢の如くなりし事を。誠の夢になし果てし。寝ぬる夜の夢と云ひ。又いや儂おろなにもと云ひてその夢に人の見えざりし事を云ひ合められたるは。例の獨特の口調にして人の及ぶ所にあらず。斯く巧みに言葉を省きて其心を餘情にまかせ。しかも一首の連續を斷たざるの妙を味ふべし。

本歌

業平朝臣

寝ぬる夜の夢をばかなみまどるめばいやはかなにもなり増る哉

風雅集

藤原爲基

○

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひち
まさりける

ぬるがうちに見るより外の現さへいやはかななる夢になりぬる

續千載集

右兵衛督基氏

覺めやすき老のれぶりの夢にこそいやはかなる程は見ふけれ

新拾遺集

權中納言實直女

寝ぬる夜に逢ふと見つるも夢路にていやはかなる契なりけり

新拾遺集

源和菴

ぬばたまのよる見る夢を夢とのみ思ふこゝろぞいやはかなる

新業集

後村上院

聞きたびに驚かされて寝ぬる夜の夢をばかなみ降るしぐれかな

新業集

前中納言實秀

おもひ寝の夢のたぐちに通ひ来ていや果敢なる身のむかしかな

此の歌古今集に出でたり。一首の意は。秋の野に入り立ちて。朝露しげき笹生の中を分け行く時は。いとしく衣の袖の濡れそぼつ事なるが。それよりも尙ほ。逢ひ見る事を得ずして空しく歸り來りし夜半の方こそ。いと悲しくも怨めしくも打ち歎かれて。涙に袖の濡れ増る事なれとなり。此の歌。四つの時いつはあれども。殊に露けき秋を點じ。秋の中にも殊に露けき野邊を現はし。野邊の草木の中にも。殊に露しげき笹を捉へて。世の中にての露けき物の隈を聚め。偕のち逢はで歸りし夜は夫よりも尙ほ露けく袖の濡れまさると云へるは。面白くも巧みなりと謂ふべく。上に笹分けし朝のと置きて。下に逢はでこし夜と据ゑたるは。弛びなき調べきま也といふべし。はたその上の句に露を言はずして露を現はし。下の句に涙を言はずして涙を思はせたるなど。例の調べの綾あるを味ふべし。

本歌 業平朝臣
秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで來し夜ぞひぢまさりける
新勅撰集 大宰大貳重家
逢ひ見ても歸るあしたの露けきは笹分けし袖におとりしもせじ
續古今集 後鳥羽院
袖に置く露のゆくへをたづねれば逢はで來し夜のみちの笹はら
續古今集 新院辨内侍
逢はで來し妻を戀ふとや秋の野に笹分けて鳴くさをしかのこゑ
新續古今 從二位藤原家隆
笹分けしみちだにあるを天の川かへるあしたの袖をしぞおもふ
拾遺愚草 藤原定家
飛ぶ鳥のなみだもいとそほちけり笹分けし野の萩のうへの露
いかにむ雪さへ今朝は降りにけり笹分けし野の秋のかよひ路
壬二集 從二位家隆
わかれても尙ほ憂きものはしのゝめの笹分くる袖に残る月かげ

有常が娘にすみけるを。恨むる事ありて。晝はま

で来て。暮るればさてのみして退りければ。

一〇六

紀有常の事既に云へり〇すみけるは。通ひけると云ふに同じ〇
まできては。詣で行きて也。來といふ詞は。古くは行く事にも來
る事にも云へり。後撰集に『夕方まで來む詣で行かむ也』と云ひて侍
りけるに。雨降りければさて來で(詣で行かで也)などといと多し〇さ
てのみして云々は。日暮るれば其儘にしてのみ退り歸りしにて。
その女をば懲らさむとしたる業也。さてのみと云ふは俗に左様し
て許と云ふ意にて。其儘ほどの意也。

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆ
るものから

天雲のば。外の枕詞なり。天雲は雲居の外に見ゆる物なれば。

外と云ふ詞に掛けて云ふなり〇なり行くか。此のかは哉に同じ〇
物からは。物ながらの略なり。さて此の歌は。天雲をば朝臣に喩
へて。その晝に來ながら常に一夜をば明かさで歸るを。甚く怨じ
て云へるなり。

一首の意は。天雲は目には見ゆれど。いとど遙けき雲居の外の
物なるが。近き頃は御身も夫と同じ様にて。晝は訪れ給ひて。し
かすがに目には見え乍ら。夕べに到ればそこそこに歸り給ふなど。
外々しくも振舞ひ給ふかな。さても怨めしの御心やとなり。

かへし

行きかへり空にのみしてふることは我が居る山の風
はやみなり

此の贈答古今集に出でたり〇行き歸りば。雲の大空をば行きつ

戻りつ漂ふ様にて。是を晝ゆきて夕べに歸る事に云へり○空にのみして經る事は。居所を定めず中空にのみさまよひて日を経る事はの意なり(ふるは雲の縁語なりとの説あれど。雲は降るなどは云へど降ると云ふ事はいかゝあらむ)○我がゐる山。我が居所とする山の意にて。是を女に喩へたる也○風早みなりは。風が烈しき故に也との意にて。女の上に取り做しては。我が心に染まぬ振舞をなし給ふ故ぞかしと也。偕此の歌は。朝臣をば天雲に喩へて女の歌ひけるより。朝臣自身天雲になりて答へられしなり。

一首の意は。我身即ち天雲の。行きつ戻りつ中空にのみありて日を経る事は。我寝泊所とする山の風の烈しき故に寄り着く能はざるが故なりとの意にて。我が晝に行きては夕べに歸りて。君の許に泊らで日敷を経るは。君が我が心に染まぬ振舞をなす故にて。我は固より君の許に宿らまほしけれど。君が寄り着かせ給はぬな

り。されば。君に我が外々しく見ゆるは。君が我をば外々しく做して見給ふにて。罪は一重に君にあり。いかで我をば恨み給ふべき事かはとの意を含めたり。西の國にしては。自身をば月になし花になして。其情を述べへたる詩も尠からねど。我國の歌。殊に短歌にしては。さる趣きを歌はむに便よからず。ほとほと其例あるを見ざるに。ひとり在中將の。巧みに其獨特の口調を綾なして是を云へるは。寔に嘆賞するに堪へたり。殊に朝臣が此の歌を詠まれし頃は。未だ西洋の諸國は天地割れてより幾程も無く。文學の光も有るか無きかの有様なりしを思へば。此の歌いよく珍らしく覺えて感深し。

本歌

行きかへり空にのみして經ることは我がゐる山の風はやみなり

續古今集

かせ早みよきたる雲の行きかへり空にのみして降るしぐれかな

中務卿親王

空にのみなほおとづれてほととぎす我がある山の雲に鳴くなり

女の弟もて侍りける人に。うへのきぬ縫ひて遣はすとして

女の弟もて侍りける人。女といふは妻女の事なり。弟は妹と云ふに同じ。即ち我が妻の妹をば妻に持てる人に。仕立たる袍を遣はすとして詠めると也。紀氏系圖に。有常の長女は業平室。次女は敏行室とあれば。敏行朝臣に遣はされけるにや。うへのきぬは袍にて。正禮束帯の時に着すべき上着を云ふ。此の詞書稿本に「女の弟もて侍りけるに。袍縫ひに遣すとして」とあり。古寫本に依りて訂しぬ。

むらさきの色濃き時は目もはるに野なる草木ぞわか

れざりける

此の歌古今集に出でたり。紫。草の名也。莖は深紫にして染料に供し。根は紫根と云ひて藥劑となす。紫といふ色は是より出でし名なり。此の草一本生ひぬれば。土の色さへ紫になりて。四邊に生ふる草木ども、皆紫色を帯びて見ゆるよし彦麿が傍廂かたがきに見ゆ。目もはるには。目も遙はなにて遙々と見渡さるゝ限りを云ふ。目(芽)及びはる(發生)は草の縁語なり。

一首の意は。紫の生ひ茂りて。いと其色濃き折しもは。野邊に生ひたる他の草木も分け隔なく。見渡す限りの物みな紫色に見ゆるが如く。我が妻に縁ある人は。我には皆がら隔なく。妻と同様に愛しく思はるゝに依りて。君に此の袍を參らする也。されば此の袍は。我が妻に遣すと同じ心にて君に參らする者なれば。希

くば心置き給はで納め給へかしと也。一首。紫生ふる野邊の状をのみ詠めるものとするも。艶に麗はしき景色空に浮びて。彼の『紫の一本故に武藏野の草は皆がらわはれどぞ見る』といへる歌にも立ち勝りて覺ゆるを。斯く云ひて袍を贈る情を含められしは。珍らしとも巧み也と謂ふべく。その一族を隔なく愛しまれし心のいと類ひなきをも。また此の一首の上に觀る事を得べし。

題知らず

おほかたは月をも愛でじこれぞ此の積ればひとの老となるもの

此の歌古今集に出でたり○おほかたは月をも愛でじ。大かたは「といふは。一通の事ならばの意にて。大空に照る月影も。大概の

事ならば大概に觀過してあらむ。よくく目出度き影ならずば賞翫せじと也○是ぞ此の「は。是即ちの意にて。俗に。是がその何々だなど云ふ「是がその」に能く當れり○老となるもの「は。老人になるものなればとの意なり。

一首の意は。あはれ今迄は聊かにて月月の照り渡りし夜は。さやけしと觀あはれと眺めて。いとしく月を賞翫せしかども。思へば是はいと愚かなる心なりき。今よりしては望の夜の如き能く能く目出度き月にして。其影の尋常一様ならぬ時は愛翫もすべけれども。たゞに其影がさやかに見ゆと云ふ如き大概の事ならば。最早愛翫すまじきぞ。それを如何にといふに。是がその積り積るに従ひて。人が老人になる年月の月なれば也。されば其聊か清く澄渡りて見ゆればとて。うちつけに愛で親しむべき物にはあらじと也。此の歌初五文字の中に。月を全く愛でじとはあらざる心

を巧に含め、次に月をも愛でじと強く云ひなし。斯くて徐ろに其理を連ねたる。圓轉の妙味ふべし。殊に上の句の下に是ぞこのとの文字を据ゑる。下の句の末に老となるものと。再びの文字を置きたるに。自ら優なる響の聞ゆるを覺ゆ。悦目抄に。遍昭。素性ともに。の文字の下によりきては。柔かに品ありてやさしと云へりとて。此の歌をもて證歌としたり。

本歌

業平朝臣

おほかたは月をもめでじこれぞ此の積れば人のおいとなるもの

新勅撰集

待從具定母

はらひかれ曇るもかなしそらの月つもればおいの秋のなみだに

續後撰集

藤原信實

老となるつらさは知りぬしかりとてそむかれなく月に月を見る哉

續後撰集

津守國經

ながめつゝ積ればひとの老が身に月も見しよのあきやこひしき

續古今集

藤原家隆

つもり行く老となるともいかでかは雪のうへなる月を見ざらむ
新後撰集 入道前太政大臣
馴れぬれば老となるとふことわりも身に知られける秋の月かな
新後撰集 津守國平
秋を経て馴れ行く月のますかゞみ積ればおいのかげを見るかな
續後拾遺 前參議能清
おいとなる習ひもさらにはれず月見るにのみつもる年かは
新千載集 靜仁法親王
身をあきの積れば老と知りながらなほやまの端の月ぞ待たる
新千載集 前大納言公隆
雪のうちに暮れ行く年を數ふればこれぞ積りておいとなるもの

惟喬の御子の狩しに罷る供にて。歸りに夜ひと夜
酒飲みして物語し侍りけるを。御子しひて入りな
むとし給ふに

此の詞書。古今集には。惟喬の御子の狩しける供に罷りて。宿に歸りて夜ひと夜酒飲み物語をしけるに。十一日の月も隠れなむとしける折に。御子酔ひて内へ入りなむとしければ詠み侍りけるとあり。夜ひと夜は。夜通し程の意也。

あかなくにまだきも月の隠るゝか山の端遁げて入れずもあらなむ

あかなくには。飽きもせぬにの意なり○まだきもは。まだ其時刻も来らざるにの意なり。月の山の端に入るは。其時刻の来れるが故なるは固よりなれど。名残を惜しむの餘りに斯くは云へるにて。いと切なる情也○隠るゝか。此のかは哉に同じ。

一首の意は。いまだ見飽きもせざるに。常よりも早く山の端に月の隠るゝ事かな。あはれ彼の山端よ。何處にか遁げ行きて隠れ

入らむとする月を入れぬ様にせよかしとの意にて。今隠れむとする月をば惟喬の御子に喩へて詠めるなり。土佐日記に「八日。障る事ありて尙ほ同じ處にあり。今宵月は海にぞ入る。是を見て業平の君の。山の端遁げて入れずもあらなむと云ふ歌なむ覺ゆる。もし海邊にして詠ましかば。浪立ち支へて入れずもあらなむとも詠みなましや云々」とあるを見れば。紀氏も此の歌をいと愛吟せられしなるべく。山の端遁げての一句。いかばかりかは後世の歌人等をうち驚ろかしけむ。また春海翁が『與大平書』に。古への人の歌には。世にあるまじき事を言ひ出でたる事も侍れど。それも皆まことを失へる事は侍らず。あら山中に海をなすかもと云ひ。山の端遁げて入れずもあらなむなど云へるは。異さまなる事の様に聞ゆれど。その造りたる池のいみじく廣さを見て。疑ふ事も無く直ちに海なりと思ひ定めて云へるが誠の心ばへにて。其池を愛づ

る心も籠りて味ひあり。また山の端は動くべき物ならねど。その動く事なき山も逃げよと思ひ入りたるは。月を慕ふ餘りに幼なく思ひなしたるにて心の誠深き也云々といへり。

母の宮。長岡といふ所に住み侍りける時。宮仕し侍るとて。しばぐも。え罷らで侍りければ。師走の晦日ばかりに。とみの事にて侍りける文を見れば。

母の宮は。朝臣の御母君にて。桓武帝の皇女伊登内親王の御事なり○長岡。山城國乙訓郡にあり○宮仕云々。業平朝臣は宮仕に暇なき身なれば。母の宮へは無沙汰勝ちなりしと也○師走は十二月の異名なり○とみの事。とみは速みにて。急ぎの事の意なり。

老ぬればさらぬ別のありといへばいよく見まくほしき君かな

さらぬ別。除去し難き離別の意にて。死別を云ふ。一首の意は。年老いぬれば死別といふ事のありと聞くなるに。我も斯く年老いて翌日をも知らぬ身となりしにつけては。いよく御身を見まほしく思はるゝ也。されば此の文を見給はゞ。一と時も速く訪れ給へかしの意なり。急の用事にて招き給ふなれば。一刻も疾く來させむ爲にとて。斯くは宣へるなるべし。枕の草紙に。業平の母の宮の。いよいよ見まくと宣へる。いみじうあはれにをかし云々。かへし

世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もと禱る人

の子のため

此の贈答。古今集に出でたり○なくもがな。がなは希ふ意のがに感動詞のなを添へたるにて。死別と云ふ事の無くてあれかしとの意なり○千代もと麟る。古今集の一本に千代もとなげくとあり。いづれにても其意は異なる所なく。千世も此の世に長らへ在せと希ふとの意なり○人の子。朝臣自身を指したるにて。たゞ『子』とのみ云ふに同じ。人の親の心は聞にあらねども子を思ふ道に迷ひぬる哉などの。人の親といふも。たゞ親と云ふ事なるに同じ。

一首の意は。かくれたるすぢ無くしていと明かなるが。あはれ此の歌を口ずさむ人。誰か此の心を懐かざらむ。寔にこれ人の子の千古不拔の真情をば。いつはる所なく歌へるものにて。景樹翁が所謂束帯して立てるが如しとは。やがて此の歌の評とも見るべ

くや。

本歌

葉平朝臣

世の中にさらぬわかれの無くもがな千代もと祈る人の子のため

續古今集

鷹司院按察

吹く風のさらぬならひも忘られて千代もとなげく花のかけかな

玉葉集

前大僧正道玄

春ごとにさそふあらしの無くもがな千代もと花を見る人のため

布引の瀧のもとにて。人びと歌よむに。

布引の瀧。攝津國菟原郡能内村の西にあり。攝津志に。源自武

庫山流。高十丈餘。如垂匹布。因名云々とあり。

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

此の歌古今集に出でたり○抜き亂るば。緒に貫きたる數多の珠を。緒より抜き亂して打ち散らすを云ふ。即ち玆に抜き亂ると云ふは。抜き亂し散らす意なるが。四の句に散らすと云へるに依りて其意を響かせたるにて。雨と降る瀧のしぶきの。玉の如くに飛び散るを。やがて誠の珠に見做したる也○まなくも散るか[は]。間斷なくも散る哉との意也。

一首の意は。われ布引の瀧のもとにて。落ち來る瀧を眺むる處に。白玉の緒を解き亂して。撒き散らす人やあるらむ。あやしくも我が袖のあたりに白玉の間なくも落ち來るかな。あはれ我が袖は狭くして。その白玉の多くは受け止め難きに。倍も可惜しき事よと也。袖の狭きにと云ふは。古へ官位低き人の服は袖狭かりしより一つには朝臣親ら身を卑下して言へるなるべし。一首優なるが中に勢ありて丈高く雄々しく。瀧のしぶきの間なく隙なく。玉

と散るらむ四邊の景色。たゞ目の前に浮ばれて。濡れぬ袖さへそいろに露けく覺ゆ。殊に瀧といふ事を更にも云はずして此の景色をば寫し出だされたる巧みは。人のよく及ぶ所にあらず。朝臣は總て情景をのぶるに。直ちに其物を捉へずして。思ひも寄らぬわたりより是を歌ふに妙を得られたり。

堀河の大臣おほいらちのみの四十よそせの賀。九條の家にてしける時に

堀河の大臣は。藤原基經朝臣を云ふ。權中納言藤原長良公の第三子にして。二條の後の兄君なり。叔父良房卿の嗣となりて。攝政關白まで昇れり。寛平三年正月十三日五十六歳にして薨じぬ。

さくらばな散りかひ曇れ老らくの來むといふなる道
まがふがに

此の歌古寫本に有りて稿本に無し。按ふに寫脱なるべし○散りかひ曇れ。散り交ひ亂れて四隣を掻き曇らし暗くせよと也○おいらくは。老ゆらくの轉にて。らくはるを延へたるなり。此の語は只おいと云ふに同じ○道まがふがには。道を間違ふ様にの意なり。宣長翁云。がにはがねにと云ふ事にて。ねにを約めてにと云へる也。儲がね」と云ふは中昔の詞に。后がね。賀がね。などのがねと同じく。豫て其料に心設けて待つ意なりと云へり。

一首の意は。四十歳と云へば。初老と云ふ曲者の必ず尋ね來る事なるが。その曲者の。君が身に尋ね來らむとする道をば取違へて。あらぬ方へ行くべき様に。やよ櫻花よ。いと散り亂れて此の九條の家の四隣を暗くせよかしの意にて。折しも春の末つ方なりしより斯くは言へりし也。此の歌。先きの詠と同じく。又思ひも懸けぬ方より情をのばへて面白く詠されたり。賀歌に秀逸を

得難しとは。古來歌學者のいふ所にて。寔にさる事なるを。老らくなど目にも見えず形も無き物を擬人して。巧みに歌ひ出でられたるは。いみじき手だれのしわざと謂ふべし。

本 歌 古今集

業平朝臣

さくらばな散りかひ曇れ老らくの來むといふなる道まがふがに

新勅撰集

源有長

もみぢ葉の散りかひ曇る夕しぐれいづれかみちと秋の行くらむ

新續古今

兼行法師

のがれ得ぬ老曾の杜のもみぢ葉は散りかひ曇る甲斐なかりけり

新續古今

源經氏

かさせども隠れぬ老にいまはたゞ散りかひ曇るはななたのまむ

月清集

攝政太政大臣

おいらくの今日こむ道は殘さなむ散りかひくもる花のしらゆき

拾遺愚草

藤原定家

暮れて行く秋も山路の見えぬまで散りかひくもれ峯のもみぢ葉

惟喬の御子かしらおろして。小野といふ所に住み

給ふに。正月せつきに訪まらひに罷りたりければ。雪のいと高く。つれづれに物悲しかりければ。歸りて贈り侍りける。

一一六

惟喬親王の御事は序論に言へり○かしらおろしては。剃髪し給ひて也○小野。山城國愛宕郡なる里にて。冬は雪いと深く降り積むに。炭竈。雪などの名所として歌はるゝいと果敢なき山里也○雪のいと高く云々。御子の庵室をば訪らひたる其日しも。雪のいと高く降り積れるに。御物語などもしめやかにして。徒然に物悲しかりしと也○歸りて贈り侍りける。家に歸りて後。御子の許へ贈り参らせたりとなり。

わすれては夢かとおもふ思ひきや雪踏み分けて君

を見むとは

此の歌古今集に出でたり。一首の意は。あはれ雲居の奥ふかき玉座のあたりにて君に謁まえ奉る日のあらむとは豫あて思ひしかども。いと降り積む雪を踏み分けつゝ。薪たこる音。炭やく煙の外には物も無き小野の山里に分け入りて。君を見奉る如き事あらむとは哀れ思ひきや。思ひもかけ侍らざりき。されば御髪みかみおろし給ひて小野の山里に隠り給ひし事は。今にしても尙ほ現まとは思はれ侍らず。いまだ猶ほ都に在あす御事とのみ覚えて。心の中の定かならねば。彼の過ぎし日に降り積む雪を踏み分けつゝ。小野の山里に君を訪ひ奉りし事をも。君が遁世し給ひし御事をも。すべて打ち忘れては。總て皆ぬば玉の夢にてはあらぬかと。いと儂おなくも疑はれ侍る事よとの意なるが。伊勢物語には。御子の御許にて詠め

一一七

る事に作り變へたれば。初句忘れてはの心甚だ薄弱になりて。哀れなる節もなくいと其本意を失へり。一首御子を思ひ奉るの真情言外に溢れて。口ずさむまゝにそいろに涙もさしぐまれて感深し。さるにてもあはれ一の御子の御身にて。御性もいと賢く。父帝の御寵愛はた並びなくおはし乍ら。悲しくも時を得給はずして。御髪を下し給ひしだにあるを。炭やく賤の男。薪こる杣人ならでは。住付くまじき小野の山里に籠りて。此の世をば捨て果て給ひし御子の御心のうち。今にして思ひ奉るだにいとかしこきを。まして此の御子をいかで帝位にと明暮に祈りかしづきたりけむ朝臣の。いかばかりかは足すりし歎き悲しみけむ。其かみの事ども思ひやるに。いと涙もといめ難し。

おなじ所なる女に。敏行の朝臣かたらひつ。罷ら

むと思ふを。雨ふるになむ思ひわづらふと申しければ

同じ所なる女。我と同所に住む女の意なり○敏行朝臣の事は既に六十九頁なる『つれづれのながめに増る涙川袖のみ濡れて逢ふよしもなし』の歌の處に云へり。此處なるは彼の歌の續きとも見るべきなれば總てを参照すべし○罷らむと思ふを云々は。女の許へ遣りたる敏行朝臣の文の詞にて。只今君の許へ參らむと思へど。折あしく雨の降り出でたれば。いかせむと思ひ煩らひ侍りとの意なり。左の歌は即ち此の玉章の返事をば。女に代りて在中將の詠まれたるなり。

かすかすに思ひ思はずとひがたみ身を知る雨は降りぞまされる

此の歌古今集に出でたり○かすくゝに思ひ思はず。かすかすは物の數多きを云ふ事にて。種々雜々の事にの意。思ひ思はずは思ひ給ふや思ひ給はざるやの意也。即ち月を見るにも妾の事を思ひ給ひ。花を見るにも妾の事を思ひ給ふと様に。何につけ彼につけて君は妾を思ひ給ふか。はた思ひ給はざるかとの意にて。言ひ約むれば。君は深く妾を思ひ給ふか然らざるかと也○とひ難みは。問ひ知り難さにの意なり○身を知る雨と云ふは。涙の事なるが。茲にては君に思はるゝ身か思はれぬ身か。何れの身なるかを知るべき雨と云ふ意を籠めたり。

一首の意は。君は我をば深く心に思ひ給ふにや。將た又思ひ給はざるにや。御心の程を問ひ知り難さに。いと涙に搔きくれ侍りと。是の歌の表に現はれたる意なるが。誠の心は。君は我をば深く思ひ給ふにや。將た思ひ給はざるにや。御心の程の知り難

さに。妾は斯く定めたり。それは今降る雨に依りて。君は深く妾を愛し給ふにや。愛し給はぬにや。その何れなるかを知り侍らむとなり。今此の雨に濡れ濡れつゝも君が來まさは。君は深く妾を思ひ給ふものと見て。行末かけて頼み侍らむ。また此の雨故に君が來まさは。君は妾を愛し給はぬものと定めて。君を頼みには倣し侍らざらむ。さて此の雨が小雨にては。假令君が來ましたりとて。妾は深く君に思はるゝ身とは定むるに足らぬ事なるが。幸にも我が身の上をトすべき此の雨は大降りになりたりとの意なり。此の歌既に序論の中にも言へるが如く。僅に三十一字の中には。人の能く云ひ盡し得べき趣ならざるを。彼の獨特の口調を巧みに綾なし。あやしきまで緩やかに調へおろして。その心をは麗はしく言ひ含められたる。あはれ感歎の聲を洩らさじとすともいかに能はむ。伊勢物語に。敏行の朝臣この歌を見て。篋も笠も取りお

へず。しといに濡れてまどひ來にけるよし記されたるは、例の作者が此の歌の心より推量りて書きなされしなるべけれど。事實も誠に然ありしならむと覺ゆ。

むかし深草といふ所に住みけり。京へ出立ちて行くとして。其處なる人に。

澤草は山城國紀伊郡なる里なり。そこなる人といふは。朝臣が其里にて契りし少女なるべし。

年を経て住みこし里を出で、去なばいとゞ深草野とやなりなむ

年を経て住みこし里は。年久しく住みし家の意なり。里と云ふ

は此處にては家の義なり(ふるさとと云ふも故郷の意と。故住みし家の意と二つあり。また新古今に。岡のべの里の主を尋ねれば人は答へず山おろしの風。など此の例多し)○深草野は。草深き野べの意にて。里の名の深草にかけたる也。さて此の『野』といふは。廣き野邊の意にはあらず。垣根の野邊なども云ひて。古へは荒れたる地をば總て野と云へるなり。

一首の意は。年久しく住み來りし此の家は。さらでも深草と云ふ名ある所なるに。こゝに我この家を出で、去りたらむには。庭の蓬。垣の淺茅など誰か刈り拂はむ。されば我が此の家を去りたる後は。庭も籬も荒れはて、いとゞ草深き野となる事ならむと也。一首あはれに淋しく調べおろされて。おのづから女に名殘を惜しむの情を含めり。

といひければ。かへし

野とならば鶉となりてなき居らむかりにだにやは君
は來ざらむ

此の歌は女の返歌なり。一首の意は、御歌の如く此の宿の野と
荒れ果てなば。妾は鶉と身をなして泣きて月を送りつゝ君を待ち
居り侍らむ。よし然りとて君は狩を爲にも來給はざらむ。借も悲
しの別やとの意にて。鶉は草深く荒れたる所に栖む鳥なれば斯く
は言へる也。又かりにだには。假初にもの意を兼ねたり。即ち妾
が斯くしつゝ君を待ち居るとも。假初にも君は來まらずやあらむ
と也。此の贈答古今集に出でたり。

大井といふ所に人々まかりて。酒たうべしに。

大井といふ所。塙本に大井なる所とあり。古寫本の言葉正しき

大井河うかへる船のかどり火にをぐらのやまも名の
みなりけり

に據りつ。大井は山城國大井川の事にて。鶉飼の名所なり。

此の歌。後撰集に出でたり。うかへる船。浮べる船に鶉飼へる
船を兼ねたり。○をぐらの山。山の名の小藏をば小暗に通はして云
へるなり。

一首の意は。大井河に浮べる鶉船の篝火に。小ぐらの山と云ふ
も其名ばかりにして。聊かも暗からず。夜も其山のさやかに見え
渡る事よと也。此の歌をぐらの山も名のみなりけりと軽く言ひて。
わたりの空をも焦がすばかりに燃え渡る船との篝火のさまを寫
し出だされたること。例の手だれたり。こと勢にて妙へなる歌の
數に洩れざるものと謂ふべし。

紀の利貞が阿波の守になりてまかりける時。あな
いせむとて今日といひ遣はしたりける日。此處か
しこ罷りありきて。夜更くるまでまうで來ざりけ
れば。

紀利貞は藏人紀貞守の子なり。彈正阿波守等に歴任し。從
五位下に叙せられ。元慶五年に卒しける人なり。○あないは。案内
にて茲は招待の意なり。○今日と云ひ遣はし云々。今日別宴を開か
むと云ひ遣りしに。其日利貞朝臣は所々に罷り歩きて遂に來らざ
りしと也。

いまぞ知る苦しきものと人待たむ里をばかれず訪ふ
べかりける

此の歌。古今集に出でたり。○今ぞ知るは。今にして始めて知り
ぬと也。○里をば離れず。此の里といふも。彼の年を経て往みこし
里と云へるに同じく。家の事なり。離れずは此處にては疎んせす
ほどの義なり。

一首の意は。人を待つと云ふ事は。いと苦しくつらきものな
る事を今始めて思ひ知りぬる事よ。さるに依りて人の我をば待つ
事ある時は。疎んずる事なく其人の家を訪ふべき物なりといふと
を。我が身の苦しかりしにつけて思ひ知りたるぞかしとの意にて。
利貞の來らざりに依りて始めて如上の感を思ひ起ししが如く戯れ
に斯くは云へる也。一首。いまぞ知る苦しき物と云ひて暫らく
其跡を断ち。遽かに轉じて人待たむ里をば離れず云々と歌ひ續け
たるは。例の獨特の口調にして面白し。

○

時知らぬ山は不盡の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

一三八

此の歌新古今集に『五月のつごもりは富士の山に雪の白く降れるを見て詠み侍りける。』とあり○時知らぬ云々。冬は雪の降るべき時にて。夏は雪の降る事なき時なるが。その時を辨へ知らざるものは富士の嶺なりとの意なり。○いつとてか。何時と云ひてかの約にて。そも此の夏をば何時と思ひてかとの意なり。○鹿。鹿には疎に白き點のあるを云へるが。總て白斑ある物の喩となれり。一首の意は。春秋夏冬の時期を知らぬ山は富士の山ぞかし。暑さ堪へ憂き此の夏をば。そも何時と思ひてか。彼の如くまだらに雪の降る事ならむ。借もあやしく奇しき高嶺なる哉となり。一首時知らぬ山は富士の嶺と。疑ふ所なく強く雄々しく云ひ捉えたる。

高情の姿いとめでたし。彼の赤人が詠と並べて。望不盡山歌の二絶唱とそ稱へつべけれ。さるにても此の歌の。古今より千載に到れる迄の七代の勅撰集中に撰び洩らされたるは。いと新古今集の幸福といふべく。山なき里に富士の高嶺を移せらむ心地す。

本歌

業平朝臣

時知らぬ山は不盡の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

續後撰集

藤原教定

とき知らぬ雪のひかりや冴えぬらむ不盡の高嶺の秋の夜のつき

續後撰集

藤原基雅

時しらぬやまとは言へど富士の嶺のみ雪も冬ぞ降りまさりける

續千載集

僧正道性

はるはまたいすみに消えて時知らぬ雪とも見えす富士のしほ山

續千載集

宜秋門院丹後

時知らぬ戀は富士の嶺いつとてか絶えぬ思ひに立つけぶりかな

風雅集

前中納言定家

とき知らぬ里は多摩川いつとてか夏のかきねをうづむしらゆき

一三九

新拾遺集

一四〇

常盤井入道
駿河なる山は富士の嶺わがごとや絶えぬけふりに結ばゝるらむ

○
暮れぬとて寝てゆくべくもあらなくに泣く泣くも猶
歸るまされり

此の歌後撰集に『人の許に屢々まかりけれど逢ひ難く侍りければ物に書きつけ侍りける』とあり○暮れぬとては、日の暮れ果たればとての意なり○寝て行くべくも云々、共に念を重ぬべくもあらざるにとの意なり。

一首の意は、君が許に行きながら、君に逢ひ難きを歎き悲しみつゝ、泣く泣くも夜道を辿りて歸らむ事は、いと悲しく果敢なき事なれども、今日しも日の暮れたりとて、君が許に宿るといふと

も、君と枕を並べて寝る事なり難きはいと亮らけさに、あはれ君が許にて獨寝の淋しき夢を結ばむよりは、彼の泣く泣くも歸るに如かず。されば今宵は君が宿に泊らずして歸り侍りなむと也。泣く泣く歸る心よりも、逢ひもせで君が許に泊らむ方、遙に悲しと云へる心ことわりにも哀れ深く、上に寝て行くと云ひて、下に歸る増れりと結びたるは、弛びなき調べなり。さて下の『泣く泣くも猶』の一句、後撰集には『たどる辿るも』とあり、何れにても同意なれども、泣く泣くもといへる方、悲びの心強くして哀れも一入深きにや、尙ほ左の歌どもに據りて按ふに、後撰集なるは正しからぬ心地す。

本歌

業平朝臣
暮れぬとて寝てゆくべくもあらなくに泣く泣くも猶歸る増れり

後撰集

もとよしの御子
破れば惜し破られば人に見えぬべし泣く泣くも猶がへす増れり

一四一

○ かり鳴きて菊のはな咲く秋はあれど春の海邊ぞすみ
よしのはま

春の海邊ぞ。ぞ文字古寫本に據る。瑞本及び伊勢物語に。春の海邊にとあるは『う』を『う』に誤れるにて正しからず。○住吉の濱。攝津國住吉郡なる海濱の稱にて風景絶佳の地なるが。此の濱の名を住み宜しに掛けて云へる也。

一首の意は。此の住吉の濱はしも。四季折々の景色とりどりに面白く。殊に秋の頃は。月澄み昇る海の面に雁鳴き渡り。波うち寄する清き渚に菊の花咲きつゝきて。あはれも一入深く覺ゆる事

なるが。その雁鳴き菊の花咲きて哀れ深き秋はあれども。此の春の海邊の景色の方。いと心長閑に覺えて。中々に秋よりも優る心地とする。されば此の濱にて春と秋と何れが住むに宜しきかと云ふに。此の業平は春を住よしの濱なると思はるゝよとの意なり。一首くちすさむまゝに。住吉の濱の浦波うらゝかに霞み渡りて。いと長閑なる春の景色。おのづから浮び出でらるゝもあやし。附言。拾穂抄に。雁鳴きて菊の花咲く云々といへるは。住吉の濱に雁鳴き菊の花咲くとはあらず。世間の秋の景色を云ふ也。即ち世に雁鳴き菊の花咲く秋はあれども。此の春の住吉の濱は。其秋よりも猶ほ勝れたりと云ふ意なりと説きたるより。後世の學者皆此の説に従へども。是は甚じき僻事なり。秋は雁鳴き菊の花咲きて哀れなる時なれども。住吉の春の海邊の方が優れりなど。無下に曲も無く愚かしき事を。いかで在中將の言ふべきかは。古

へ住吉の濱は。秋毎に菊の花渚に咲き續きて。さらぬだに清き濱邊に一入の美を添へしにて。坂上、是則朝臣の歌(新續古今に出でたり)にも。

一四四

波とのみうちこそ見ゆれ住吉の岸に残れる白菊の花と詠めるが
あり。また海邊にして小田もあなれば(新後拾遺。松にのみ音は響きて住吉の岸田の穂なみ秋風ぞ吹く)雁金の群れ渡り來て鳴きなむ
は。もとよりの事ぞかし。されば雁鳴きて菊の花咲く秋と云へる
は。住吉の濱の景色を指したる事論を俟たず。即ち其濱の秋の景色の美はしく哀れなると。春の景色の清らに長閑なるとの優劣を云へる也。

○ 思へども身をしわけねばめかれせぬ雪の積るぞ我が

こころなる

身をしわけねば。身體を二つに分離せねばの意なり。○めかれせぬは。目離れせぬにて。つくつくと目を離たて物を打ち見まもる意なり。此の歌は小野の山里に遁世し給ひし惟喬の御子を訪らひ奉れるに。其日しも大雪なりしかば。雪に降り籠められたりと云ふ事を題にて詠めるよし。伊勢物語に見ゆ。

一首の意は。君が御許に留まりて。いつ迄も君を見奉らばやとは思へども。官職を帯びたる身なれば思ふ儘ならず。されば君が御許に長く止まりてあらむとは。此の身體をば二つに分けねば能はざる事なり。然りとて夫は爲し難き事なれば。やがて御暇申して京に歸らざるべからず。されども此の儘御暇申さむ事は本意にては侍らぬ也。心の中には尙ほ何時迄までも御許に在らまほし

一四五

きにて、今つく／＼と見つゝある此の大雪の。いとゞ降り積りつ
つ歸路をば埋み果て歸り難くなるこそ。業平の本意にては侍るな
れと也。一首斯くばかり廣く深き心情をば。三十一字の僅なる中
に歌へるだにあるを。巧みに言葉を略き調べを綾なして。いとゞ
あはれなる餘情をば含められたる。獨特の妙技感するに堪へたり。
さるにても惟喬の御子の。御自らありしにもわらずなり給ひしよ
りして。其かみ明暮にかしづき奉りつゝ。いとゞ御惠の露に袖う
ち濡らしけむ人々の心さへ。大かたはありしにもわらずなり果て
し世に。ひとり古へを忘れずして。年々に御菴をば訪らひ參らせ
たりけむ朝臣の心の。いとゞしく清く深かるも。彼の目かれせぬ
雪の積るにぞよそへてまし。

○ 年だにもとをとて四つは經にけるを幾たび君をたの

み來つらむ

續千載集に出でたり。此の歌は紀有常が妻の年老いて尼になら
むとしける折に。有常が許より其事をば文に記して。
手を折りて逢ひ見し年をかぞふれば十といひつゝ四つは經にけ
りと云ふ歌をおこせしかば。朝臣いとゞあはれがりて。さまゞ
の調度ども與へなどし。夫に添へて遣しける歌とぞ。さて有常の
歌の意は。指をりて妻と連れ添ひし年を數ふれば四十年の久しき
を經たりとの意にて。朝臣の歌は。有常の妻の身になりて詠める
心なり。

一首の意は。年すらも四十年を經しものを。まして其間の月日
のいとゞ久しきは。算ふるに遠なからむかし。さるにつけて其長
き月日の中には。嬉しき事。悲しき事。苦しき事。愁たき事など。

種々さまざまの事にあたりて。其折毎に君をのみ頼みに思ひしが。斯かる事毎に幾度君を頼みに思ひて今に到りけむ。おもへば思へば御名残惜しくぞ侍ると也。十とて四つはと云ふは。十と云ひつゝ四つは經にけりと云へるに同じく。十と云ひて指を折り。また十と云ひて指を折り遂に十をば四つ重ねたる意なり。一首。夫ならでは頼みに思ふかた無き女の境界をばあはれにも寫し出だされて。感情言外に溢れたり。

○

そむくとて雲には乗らぬ物なれど世の憂き事はよそになるてふ

此の歌。新後拾遺集に出でたり○そむくとて。背くといふは世

を背く事にて。憂世を厭ひて山里に隠れ住むを云ふ○よそになるてふは。外よそに遠ざかるといふとの意にて。よそは雲の縁語なり。一首の意は。憂世を厭ひて山里に隠れ住めばと云ひて。別に空中を飛行する仙人の如く。雲に乗りて人間界を離るるわけにても無き物なれども。おのづから世の憂き事どもは外よそに遠ざかり果てゝ。更に耳にも聞えず目にも見えずなると云ふ事なるが。あはれ君が世を背きて山里に遁れ給ふと聞くにつけて。いとゝその羨まれ侍る事よとの意にて。一首世を厭ひて山へ罷る人に贈りし歌なり。躬恒が歌に「世を捨てゝ山に入る人山にても尙ほ憂き時はいつち行くらむ」と云へるは。齊しく世を遁れし人の許に遣しける歌なれども。聊聊か理理めきて覺ゆるを。是はさる節は露だにも無く。中々に心おさなくして面白し。殊に雲には乗らぬの一句の奇警なるを味ふべし。

種々さまざまの事にあたりて。其折毎に君をのみ頼みに思ひしが、
斯かる事毎に幾度君を頼みに思ひて今に到りけむ。おもへば思へ
ば御名殘惜しくぞ侍ると也。十とて四つはと云ふは。十と云ひつ
ゝ四つは經にけりと云へるに同じく。十と云ひて指を折り。また
十と云ひて指を折り遂に十をば四つ重ねたる意なり。一首。夫な
らでは頼みに思ふかた無き女の境界をばあはれにも寫し出だされ
て。感情言外に溢れたり。

○
そむくとて雲には乗らぬ物なれど世の憂き事はよそ
になるてふ

此の歌。新後拾遺集に出でたり○そむくとて。背くといふは世

を背く事にて。憂世を厭ひて山里に隠れ住むを云ふ○よそになる
てふは。外よそに遠ざかるといふとの意にて。よそは雲の縁語なり。
一首の意は。憂世を厭ひて山里に隠れ住めばと云ひて。別に空
中を飛行する仙人の如く。雲に乗りて人間界を離るるわけにても
無き物なれども。おのづから世の憂き事どもは外よそに遠ざかり果て
ゝ。更に耳にも聞えず目にも見えずなると云ふ事なるが。あはれ
君が世を背きて山里に遁れ給ふと聞くにつけて。いとゞその羨ま
れ侍る事よとの意にて。一首世を厭ひて山へ罷る人に贈りし歌な
り。躬恒が歌に「世を捨て、山に入る人山にても尚ほ憂き時はいづ
ち行くらむ」と云へるは。齊しく世を遁れし人の許に遣しける歌な
れども。聊いささか理ことわりめきて覺ゆるを。是はさる節は露だにも無く。中
々に心おさなくして面白し。殊に雲には乗らぬの一句の奇警なる
を味ふべし。

○
夏の夜の星か河邊のほたるかも我が住むかたの海人のたく火か

新古今集に出でたり。此の歌は朝臣か物へ行きける歸途。遙かに己が家の方に漁火のほのめくを望み見て詠まれし也。螢かもは疑の『か』に感動調の『も』を軽く添へしにて。たゞに『か』と云ふに同じ。

一首の意は、遙かに我が住む家の方を眺むるに。數多の火影の見え渡るは、そも何の光にかあらむ。此の夏の夜の星なるか。河邊にすだく螢の影か。將たまた海士の漁火かと也。此の歌。我が住む方に當りて見ゆるはと云ふ心を。我が住む方の海士のたく火かと云ひ含めたるは。例の朝臣が口ぶりにして。面白き言葉の續

けざまと謂ふべし。

○
頼まれぬ憂き世の中を歎きつゝ日かげにわぶる身を
いかにせむ

此の歌後撰集に『思ふ心ありて前の大政大臣に寄せて侍りける。』とあり。前、太政大臣といふは藤原良房の事なり。さて此の歌の心さだかならざれども。按ふに朝臣が公の謹慎にて籠り居給ひしほどの詠なるべく。それを日かげにわぶる身とは詠めるなるべし。さらば其一首の意は、己が心に行はむとせし事は露だにも行はれずして。その爲にしも反りてあらぬ罪を得つるなど。いと頼みになし難き此の世の中を嘆き悲しむ。あした夕べを過す身の

果無さまよふよし夫とても常の身ならむには。其うれたさを慰めは
るけむかたもあるべきに。公の謹慎に籠りて天日をも仰がれ得ざ
る身は。只憤慨の増り行くのみ。おはれ慨き哉。そも此の罪なく
して謹慎に籠り。世をうちわびつゝ日を経る身をば如何にせむと
の心にて。其餘情には。此の儘にして尙ほいつ迄も謹慎の解かれ
ざらむには。よしそれ迄ぞかした。何事か心に期する所ある如き
響を含めるが如し。されば其何事か心に期する所ありしを。思ふ
心ありてとは云へる歟。然らば朝臣が謹慎に籠る身となり給ひし
も。もとは良房等に忌憚せられ。其計らひに依りてなるべく。夫
をしも甚く憤りて。其心をば良房に示されけるにや。尙ほ考ふべ
し〔下句〕日かげにわぶる身。古寫本に據る。塙本及後撰集に。日
かげに生ふる身とあるは。わふるの『王』を『生』に寫し誤りしなるべ
し。わぶと云ふは志を得ずして呻吟する時の嘆聲を云ふ。委しく

は。わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に云々の歌の處にいふべし。
○
いとひては何か別の惜しからむありしにまさる今日
はかなしも

此の歌は續後撰集に「心にもあらで別れける人に遣しける」とあり
○何か別の惜しからむは。如何ぞ別の惜しくあらむや惜しまれば
せじとの意なり○ありしに増るは。ありし別に増りての意なり。
上に別れの事を云ひたれば。茲には省かれしにて。例の朝臣獨特
の口ぶり也。

一首の意は。君をば我が厭ひ嫌ひて離別するならば。何か別の
惜しまれむや。別の惜しまるゝ事はあらじ。さて此の程は君が許

に通ひて數多たび曉の別を惜しみ歎きしが。彼の曉の別よりも。今日の離別（わか）はいや増りて悲しく惜しまるゝぞかし。斯く今日の此の離別をば歎き悲しむにつけては。君をば我が厭ひて離別するにあらざる事を知り給へかしの意にて。君と別るゝは實に我が本意にはあらざれど。去り難き事あるに依りてなれば。おはれ我をば情なき者よなどな怨みそよとの餘情を含めたり。一首。厭ひては何か別の惜しからむと云ひ切りて名殘なく其迹を斷ち。ありしに増る今日は悲しむと。俄に轉じて全く別事を歌ひ。斯くて其心を本句の上に續けて一首をしたてられたる。例の獨特の口調ほとほと其妙を極めたりと謂ふべく。ありしに増ると云ひて巧みに言葉を省かれしも。人の克く及ぶ所にあらず。

出でゝいにし跡だに（いまだ）變らじを誰が通ひ路と今はなるらむ

此の歌新古今集に出でたり○出でゝいにしは。出でゝ去りしと云ふに同じ○跡だに未だ。あとは足處（あしど）の義にて。總て物の過ぎたる後に遺る標（しるし）を云ふ。茲なるは足跡の意也。

一首の意は。君の許へ我が通ひしは。たゞ昨日今日の事なれば。我が歸りし折の足跡なども未だ消えずして。其儘に變るまじきが。その我が踏み通ひし足跡もまだ消えて残れる門邊の路は。今は如何なる人の君に通ふ路となる事ならむかとの意にて。己が歸りける後。他し人を迎へはせずやと疑ふ心に。想像して斯くは詠める也。一首女の心のあだなるより其事の疑はるゝを云ふに。女の上には露だにも言ひ及ぼさずして。其家の通路を捉へて巧みに其心

を言へる事いと面白し。曩にも既に云へりし如く、朝臣は總て思ふ心を述ぶるに、直ちに其事を言はずして其事をいふに妙を得られたる也。

なかに絶えける人の。年ごろ經て逢はむといひければ。

此の詞書塙本に脱せり。古寫本に依りて補ひつ。

今までに忘れぬ人は世にもあらしおのがさまさま年の經ぬれば

今迄には。君と中絶えしより今に到る迄にとの意也。○おのがさまさま云々。自がさまは。俗に各自氣儘にの意にて。君も我も心の儘にさまさまなる事をなして年月を送り過せしなればと

の意なり。

一首の意は。君と中絶えしはいと昔の事なるが。彼の時よりしては。君も我も自がさまは爲さまほしき事をなしつゝ。知らず知らず數多の年を経しなれば。其長き年月を経し今までに。霎時も我を忘れ給はずにありし事はなからむ。さる人は世にもあるまじき事なり。されば此頃君の再び我に逢はむと宣ふは。今迄我を忘るゝ事なく思ひ居りてにはあらで。俄かに思ひ出してしか宜ふなるべければ頼まれ難しと也。此の歌。いま迄に忘れぬ人はあらざらむなどは言はで。世にもあらじと強く言ひ定めたるが面白しと定家卿はいへりとか。げにさる事に覺ゆ。

○

春日野の若むらさきの摺ごろもしのぶのみだれかぎ

り知られず

此の歌は伊勢物語の巻頭に出で。また新古今集に入りたり○春日野。塙本に武藏野とあり。伊勢物語。新古今集。古寫本の諸書に春日野とあるに據る。此の野は大和國添上郡にありて。其處に紫(草)の生ひけるより。次の句に若紫のと云はん爲めの序に置ける也○わか紫。紫の色の淺きを云ふ。紫草のうら若き程は其色も薄きによりて名づけし也○摺衣は。紫。山藍。月草などにて。種々の模様を摺り附け染めし衣を云ふ。茲なるは即ち紫の摺衣也。さて此の衣は陸奥國信夫郡より出だすに依りて。信夫摺。信夫も摺など云ふ也○しのぶの亂れ。信夫摺の亂れとの心ばえなるが。上に摺るると言ひたれば茲には省けるにて。信夫摺の模様はしどろもどろに亂れたるより。忍ぶ思ひに心の亂れたる意に云へる

なり。

一首の意は。君を見てしより。君を戀ひ忍ぶ思ひに我心は限り知られず亂れける事よと云へるにて。思想は取り立て、珍らかなる節も無けれど。詞はなやかに委うるはしく。聲調清くなだらかにして。ほとく花麗の極を盡せり。たとへば艶に美しき女の。錦の衣装ひて立てるが如しとも謂ふべくや。

本歌

業平朝臣

千載集

從三位賴政

續後撰集

鎌倉右大臣

續拾遺集

藤原伊信

新後撰集

常盤井入道

いる見えぬこれやしのおのすりころも思ひ亂る、袖のしらつゆ
新後撰集 後嵯峨院
 こゝろのみかざり知られぬ亂れにていく年月をしのぶもぢすり
續千載集 藤原爲定
 袖にこそみだれそめけれ春日野のわかむらさきの萩がはなすり
新千載集 參議雅經
 かすが野の雪間の草のすりころもかすみのみだれ春かぜぞ吹く
新拾遺集 後嵯峨院
 分け過ぐる千ぐさの花のすりころも思ひみだる、旅のそらかな

身を歎き侍りて

住みわびぬ今はかぎりと山ざとにつま木こるべき宿
 もとめてむ

此の歌後撰集に出でたり。○住みわびぬは、此の世の果敢く頼み
 無さに、住むもわびしく思ひなりぬとの意なり。○今は限りと、今

は此の世の中に交らふ事を限りとなしての意なり。○つま木こるべ
 き、つま木は爪つま先にて折り得べき程の薪を云ふ。こるは伐ると云
 ふに同じ。

一首の意は、あはれ果無くも頼み難き此の世の中に、頼み無き
 人々にかゝづらひつゝ、明し暮らす事は、いとゞ佗しさの極みて、
 最早厭はしくなり果てにき、いでや今は此の憂き世の中に立ち交
 らひて住む事を限りとなして、世の憂さの耳にも聞えず目にも見
 えざる山里に隠遁し、其山にして爪木など樵りつゝ、安く静けく
 餘命を畢へつべき宿をしも求めてましと也。一首住み佗びぬと起
 句をば強く云ひとぢめて、いとゞ憂世を慨きつゝ、今迄を送り來り
 し意を含め、今はしも世にある事の一日も堪へ難きを二句に收め、
 果敢なき山里に籠りて果敢なき賤が業をしつゝも年月を過さむか
 た、世に交らふに増れりと様につゞけられたるにて、いとゞしく

世を倭むの心情言外に溢れたり。按ふに此の詠は、朝臣が志ならずして、藤氏の爲めにさまざまの迫害を蒙り、頼み無き世の有様をば憤り果てし折の詠なるべし。

身のうれへ侍りし時、津の國須磨の浦といふ所に罷りて住み始めけるに。

難波津を今日こそみつの浦ごととにこれや此の世をうみ渡るふね

此の歌後撰集に出でたり。身の愁へと云へるは、藤原氏の爲めに遠ざけられし事などにや○難波津。日本書紀神武紀に。戊午、年春二月丁酉丁未、皇師遂東、船體相接、方到難波之碇、會有奔潮太急、因以名浪速國、亦曰浪華、今謂難波訛也とあり。此の地は

攝津國西成郡より東生郡の西邊迄にかけての號なり○三津の浦。また御津とも書けり。難波津の内に含まれたる浦(西成郡に屬す)にて。其浦の名の三津に見つを掛けて言へる也○うみ渡る船は。うみ渡る舟ならむの意にて。海に倦みを兼ねたり。

一首の意は、今日我始めて此の難波津に來て見るに。三津が濱の浦々を始めて此面彼面に海士小舟の數しれず出で浮びたるが。是ぞ即ち世の人々が、世を倦み厭ひつゝ此世を渡る有様ならむと觀じぬ。彼の艫楫を取る様も苦しげに將忙はしげに見え。舟と舟と後れ先だつ様も見え。浮き漂ひてさだめ無き様も見え。浪のまにまに浮き沈むさまも見ゆるは。即て此の世の人々が世渡るさまに似たるよとの意にて。その須磨へものする道のほどに此の浦を過ぎ。此の有様を觀じて言ひ出でられしなるべし。一首。今日こそみつの浦ごととに歌ひて。其浦ごととに浮べる舟の事を云はず。

斯くて『是や此の世をうみ渡る舟』と。直ちに其感情を述へ。それに依りて其浦ごとに舟の浮べる景色をも思はせたるは巧みなる調へさまと謂ふべし。さるにても其浦の名の。なにはの愁もあらぬ身にして。長閑かにも三津の濱邊の見つらむには『心あらむ人に見せばや』なども詠め渡さるべきに。うちつけに斯く果敢なくも歌ひ出でられしは。そもいか計かは朝臣が心に。世の中を歎くおもひの満ち満ちたりけむ。

田村の御時。ことにあたりて。津の國須磨の浦と云ふ所に籠りて。都の人に遣はしける。

田村と申すは文徳天皇の御事也。崩後田邑山たがやまの御陵に葬り奉りしより此の稱ある也。○事にあたりて。此の詞は其意甚だ廣ければ。如何なる事とも定め難けれど。按ふに謹慎すべき由の仰言など蒙

りて。須磨の浦に籠り給ひしなるべし。

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ

此の詠。古今集に行平朝臣の詠として出でたるを以て。此の集(業平朝臣集)に此の歌のあるを疑ふ人もあるべけれども。茲に出でたるは中々に正しきにて。疑ふは却りて非也。委しくは後に云ふべし。○わくらばは。邂逅たまたまの意也。此の語は素病葉もとまらの稱にて。常磐木の中に罕に赤き葉のあるを云ふ。夫は罕にある物なれば。稀にある事の喩に取りて。やがて罕なる意の言葉になりたる也。大國隆正翁は云へり。○藻鹽たれつゝ。是は海藻より鹽を採る事を云ふ也。海藻より鹽を採るには。先づ海藻を掻き集めて簀の上に積み。是に幾度となく海水を注ぎかけて潮を染み込ませたる後。火

に焼きて水に掻き垂れ。其上澄を釜に移して煮つけて製しあぐるにて。藻鹽たれつゝとは。即ち海藻に幾度となく潮を垂らしつ垂らしつする折の事を云ふ也。〇わぶと答へよ。わぶと云ふは志を得ずして呻吟する時に「わ」と嘆聲を發するを。やがて波行に活かせたる語なり。されば志を得ざるさまを云ひてわぶといふなり。枕草紙わびしげに見ゆる物の段に。六七月の午未の時ばかりに迷げなる車にえせ牛かけてゆるがし行くもの。雨降らぬ日はりむしろしたる車云々などあるも。志を得ざる様なるを云ふ也と黒川真頼翁は云へり。即ち茲にわぶと答へよと言へるは。志を得ずして呻吟しつゝありと答へよとの意にて。曩に「頼まれぬ憂世の中を嘆きつゝ日かげにわぶる身を如何にせん。」また。「住みわびぬ今は限りと山里に爪木こるべき宿求めてむ」など見えたるも。皆此の意を含める也。

一首の中は。都の中にて我が身の上などを問ふ人は恐らく有るまじけれど。若し邂逅にも問ふ人あらば。業平は淋しき須磨の浦に籠りて。賤しき海士の業とする鹽焼きなどを爲しつゝ。さまざまの難儀を重ねて。いとゞ其身の不遇なるを嘆じ居れりと。君よ其人に答へよかした也。古今集に。宮の中に侍りける人に遣はしけるとあるを見れば。其人に托して帝に此の歌を奏し奉らしめ。とく召かへし給ふべき宣旨をば蒙らばやとしたる業なるべく。其須磨の浦に籠りしも。帝の御心に出でしにはあらず。藤氏の爲めに遠ざけられしなるべし。一首悲痛の情景言外に溢れて。いとゞ哀れなる響き高く。咏ひまゝに感深く覺えて。藻鹽たれぬ袖もわやしく濡れまさりぬ。

古今集に此の歌の作者の在原行平朝臣とあるは。寫し誤れる本にして正しからず。故小中村清矩翁所藏の『右古今倭和歌集以家隆

卿自筆之本令比較畢尤可爲證本者也永祿七年甲子三月九日正二位藤原爲益判の奥書ある本に。在原業平朝臣とあり。また華頂宮尊超親王家の本に據りて松屋翁が校せられし古今集にも行平を業平に改められたれば。此の歌の作者は業平朝臣なること疑ふべからず。按ふに此の詠は。朝臣が藤原氏に忌憚せられ。例の遠ざけられて須磨の浦に籠りて詠まれしにて。爰に。身の愁へ侍りし時津の國須磨の浦と云ふ所に罷りて住み始めけるにと題し。難波津を今日こそみつの浦とに是や此の世をうみ渡る舟と歎かれしと同じ秋の詠なるべし。兄君行平中納言は。皇胤紹運録に配流の二字見ゆれども。在納言流罪の事。文徳實録を始め其餘の史に見えず(按ずるに紹運録なるは古今集の誤寫本に此の歌の作者の行平朝臣とあるに依りて後人などの記入せしものなるべし)はた此の君は藤氏の爲に忌憚せられし迹無きのみならず。重く其世に用ゐられしさま

にて。優詔に預りし事も屢々ありしが如くなれば。田村の御時とにあたりて津の國須磨の浦に籠れる事などあるべくもあらず。かゝれば此の集に此の歌の出でたるは。誤謬ならぬは素よりにして。最も正しとすべきなり。

東の方に。友だち二人三人ばかりさそひて行きけり。三河の國八橋といふ所に罷りけるに。杜若のいと面白く侍りけるを見て。木のもとにおり居て。かきつはた。といふ五文字を句のかみに据ゑて。旅の情を詠めと侍りければ。

東の方。日本書紀に於是日本武尊曰。蝦夷凶首。威伏其辜。唯信濃國越國。頗未從化。則自甲斐北轉歷武藏上野。西逮于碓日坂。

時日本武尊ツキニシノヒコ有願弟コトノ橘媛トチノ情ナリ 故登コトノ確日嶺タカヒノ 而東南望之トシテ 三歎曰ミタヒテ。
 吾孀者耶ウレハ 故因號山東諸國コトノ 曰吾孀國也コトノとあり○三河の國八橋云々。稿本に。友だち二人三人計さそひて罷りけるに杜若のいと面白く云々とあるは。寫し脱しゝなるべし。古寫本に據て補ひぬ。
 ○木の下キノにおり居ては。馬より下りて樹蔭に休息する意也。但し此の一句古寫本には見えず。
 から衣カきつゝなれにしつツましあればはるハくクきぬる
 たタびをしぞ思ふ

此の歌古今集に出でたり○から衣カは。唯衣とのみ云ふに同じ。からといふは物を賞美して云ふ詞なる事六二頁に云へり。扱此の五文字は次に「きつゝなれにし」と云はん爲の序也○きつゝなれにし。きつゝは着つゝ。なれにしは褻れにしにて。共に衣の縁語也。褻

ると云ふは。もと衣の垢つき穢るゝ事をいふ詞にて。その褻れにしを馴れ親しむ意に通はして云へる也。さて物の垢つき穢るゝ事を褻るといふは。萬葉集卷七。几爾吾之念者オホニシノ下服而オホニシノ 穢爾師衣乎オホニシノ 取而將著八毛オホニシノ君を我が思ふ心の深からずば君が下服オホニシノになして着古したる垢つき穢れし衣を我は取りて著る事あらじと也オホニシノ同卷十五。多婢爾氏毛オホニシノ母奈久波オホニシノ夜許登和伎毛オホニシノ故我オホニシノ 牟須比思比毛オホニシノ波奈禮爾家オホニシノ 流香毛オホニシノ旅行中凶事無くて無事に早く歸り來給へと言ひて妹が結び呉れし此の衣の紐は長の旅路に垢つき穢れたりと也オホニシノなど此の例尙いと多し。また褻ると馴るとを通はし云へるは。萬葉集卷十一。吳藍之八鹽乃衣オホニシノ朝旦穢者オホニシノ雖益希將見裝オホニシノ 後撰集躬恒が歌に。伊勢の海の鹽やく海士の藤衣オホニシノ褻オホニシノるとはすれど逢はぬ君かな。源氏物語夕霧卷。松島の海士の濡ぎぬ褻オホニシノ馴れぬとて脱オホニシノぎかへつてふ名を立めやは。など又いと多し。是等に據りて「唐衣きつゝなれにし」

も。唐衣を身に纏ひつゝして着ふるし褻れし事に云ひ掛け。斯くて親しむ意の馴れしに通はしたる事を知るべし。然るを古來此の句を解きて。衣は身に着き馴るゝ物なれば。唐衣と言ひて馴ると続けし也と云ひ傳ふるは。甚じき僻言にして取るに足らざる也。○つましあれば。つまは衣の縁語(襖)を綾なして妻女の事を言へる也。○はるばる來ぬる。遙々と遠く來れるの意にて。はるは衣を張るの縁語なり。○旅をしを思ふ。旅を悲しく思ふとの意にて。旅をし及び妻しあればの『し』文字は。詞調を強めむ爲に据うる助辭なり。さて此の歌は。から衣きつゝと云ふまでは妻と言はむ爲の序にて。其意あるにはわらず。

一首の意は。人里遠き山かげに日を暮らしては。岩が根を枕に露をかた敷き。問ふ人も無き谷わひに路を失ひては。物凄じき禽獸の聲を聞きなど。旅は物憂きならひなるに。わきて我には年來

馴れ親める愛しき妻の京に残りて在るに依り。人皆にまさりて旅の悲しくも物憂く覺ゆるぞかし。あはれ都に残れる妻よ。恙なく眞幸くありや。さるにても彼の愛しき妻に別れて。歸らむ日をばいつとしも。さだめなき旅にさすらひつゝ。遙々と遠くも別れ來ぬる事の悲しさよと也。一首衣を素として總て其縁語を以て詞をかざり調をいたはり。かきつばたの五文字をば。聊かも耳だつ節なく。巧みに句の頭に置けるだにあるを。思想はた哀れに面白く云ひ現はされたる。さらに人技としも思はれず。入神の妙寔に感ずるに堪へたり。

本歌

業平朝臣
から衣きつゝなれにしつましあればはるばる來ぬるたびをしぞ思ふ
續拾遺集
光明寺入道

あまのほら日もゆふ沙のからころもはるばるくきぬる浦の松かぞ
新後撰集
土御門院

ふぢばかまきつゝなれ行く旅びとの襦野の原にあきかぞ吹く

續千載集

忠房親王

なじか鳴く萩のにしきの店ころもきつゝなれにし妻や戀ふらむ

續後拾遺

爲道朝臣女

なにゆるふにきつゝなれにし秋かぜに衣かりがね音のみ鳴くらむ

新千載集

津守國助

たび寝する衣のせきをもるものははるばるきぬるなみだ也けり

新千載集

前大納言爲定

旅ごろもなれはまさらぬ道なればはるくきてもふみ迷ひつゝ

新拾遺集

前大納言爲家

からころもはるくきぬる旅寝にも袖ぬらせとや又しぐるらむ

旅ごろもはるばるきぬる八つ橋のむかしのおとに袖も濡れつゝ

新續古今

前中納言宗重

夏ごろも今日たち更ふる袖もなほきつゝなれにし袖の香ぞする

新後撰集

讀人しらす

みやこ思ふなみだを乾さて旅ごろもきつゝなれゆく袖のつき影

武藏と下總の中にある角田河のつらにおりゐて思ひ侍るに。いと遙かにも遠くまで來にけり。渡守日暮れぬと急がし侍りければ。船に乗りて渡らむとし侍るほどに。皆人も悲しく思ふ事なきにしもあらぬに。白き鳥の嘴と足と赤きが河づらに侍るを。何の鳥とかいふと問ひ侍りければ。都鳥となん。渡守いひ侍りける。

此の詞書の大意は、武藏の國と下總の國との境を流るゝ隅田河の河畔に憩ひて、あはれ都をば立離れつゝ、いと遙に遠くも來ぬる物哉と思ふに、悲しくも都の事のみしのばれて、しばし茫然としてそなたの空を眺め居たるに、日も暮れぬるに速く乗り給へ

と渡守の急がしければ。即て船に乗りつ。斯くて河を渡らむとする程も。此の河を渡らば愈都に遠ざかる事なれば。諸共に來れる人々等も皆悲しく思ふ事無きにしもあらぬに。折しも白き鳥の河の面に居るを見て。彼の鳥は何と云ふ鳥ぞと問ひしに。都鳥と申すと渡守の答へしかば詠めると也。

名にしおはゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありや無しやと

此の歌古今集に出でたり○名にし負はゞ。都と云ふ名に負ひたる鳥ならばとの意なり○こと問はむは。物問はんと云ふに同じ○ありや無しやば。此の世に在りや無しやの意にて。その生死を問へる也。

一首の意は。河づらに浮び居る都鳥よ。汝が都といふ名に負へ

るに背かざらば。都の事を知らざる事はよもあらじ。さだめて都の事を能く知りてぞあるらむ。いざらば物問はん。我は都に残し置きたる妻の安否の。いとど心もとなく思はるゝ事なるが。あはれ我が京の妻は。恙なくて此の世に在りや。空しくなり果はせずや。その答こそ聞かまほしけれと也。あはれ今の世にしては。百里の道も時の間に行き歸りつべく。千里の間も瞬く隙に言交はしつべけれど。古へ此の吾妻の果に來て京の空を仰ぎやれば。人間の境も異なるばかり覺えたりけむ。されば其家に殘せる妻や子の。生きて此の世に在りや無しや。思ひ疑はれし心を酌むに。いと涙もとめ難し。さるにても此の歌の巧なる。こゝろ無き鳥を擬人して。こゝろ有るものに見做し。俄にも都の事を問ひ出でたる。そも何等あはれなる調べぞや。

本歌

業平朝臣

名にしおほはゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありや無しやと
後拾遺集 和泉式部

こと問はゞありのまにく都鳥みやこのことをわれに聞かせよ
新古今集 女御徽子女王

ひとをなほうらみつべしや都鳥ありやとだにも問ふを聞かれば
新古今集 宜秋門院丹後

おほつかな都に栖まぬみやことりこと問ふ人にいかゞこたへし
續古今集 道因法師

思ふ人ありやと問へばみやことり聞きも知られぬ音のみぞ鳴
續古今集 太上天皇

みやこ島なにごと問はむ思ふ人ありや無しやはこゝろこそ知れ
續古今集 中務卿親王

此の里はすみだ河原もほど遠しいかなるとりにみやこ問はまし
續拾遺集 寂蓮法師

こと問はでおもひしよりも都どり聞きて悔しき音をや啼くらむ
新後撰集 法師清春

みやこ島いく代かこゝにすみだ河ゆきゝの人に名のみ問はれて

新拾遺集

藤原俊成

すみだ河ふる郷おもふゆふぐれになみだを添ふるみやこ島かな
新續古今 護人しらす

遠からぬものとさとりのみやこ島こと問ふ人の無きぞかなしき
新業集 宗真親王

おもふ人なしとは聞きつみやことり今は何てふことか問ふべき

やまひして。かぎりと覚えしに。人に遣はしける。
つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日きのふけふとは思
はざりしを

大和物語に、水尾の帝の御時。左大辨わたすけの女むすめ。辨の御息所とてい
ますがりけるを。在中將しのびて通ひけり。中將病いと重くして
わづらひけるを。舊ふるのめどもあり。是はいと忍びてある事なれ
ば。え行きも訪らひ給はず。忍びくになん訪ひけること日々

一八〇
 ありけり。さるに訪らはぬ日なんありける。病もいと重りて其日
 になりけり。中將のもとなり。

つれづれといと心のわびしきに今日は訪はずて暮らしてひと
 やとておこせたり。よはくなりたりとて。いといたく泣き悸ぎ
 て。返事などもせんとするほどに。死にけりと聞きていみじがり
 けり。死なむとする事いまゝとなりて詠みたりける。

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしと
 と詠みてなむ。はてたりける。』とあり。されば詞書に『人に遣はし
 ける』とあるは。同じく辨の御息所に遣はされけるにや。されど是
 はさのみ僉議するの要もなかるべし。さて此の歌は古今集哀傷巻
 に。朝臣の次子在次君の辭世と共に並びて出でたり。

一首の意は。あはれ我は今。死出の旅路に赴かむとすなり。素
 より是は人の途に行く道にして。脱るまじき掟なりとは。かねて

聞き豫て知る所なりしかども。ざりとす此の昨日今日に。その途
 に行く道に行くべき事とは思はざりしを。あはれ今はしも其時來
 りて。我は死なずしてはえわられざる事かと也。一首。遂にゆく
 道とは豫てと歌ひ出で。命はたゞ水の上の泡。やがて消えなん
 事を思ひ知る知る。さのみには是を悲まらずして。只何となく明し暮
 し、心をあらはし。昨日今日とはと一步を進めて。その運命の旦
 夕に通るに及びて。俄かにも驚かれぬる心情を洩らし。思はざり
 しをと果敢なくとぢめて。言ふに言はれず説くに説かれざる餘情
 を含め。死に臨みての真情を隈なくも打ち出でられたる。悲痛の
 想調そも何物にか喩へむ。さるにても才學ならび秀れたる朝臣に
 して。彼の儒佛などの悟りがましき意に諂はず。おもふ心の儘を
 さながら歌ひ出でられし事の。かしこくも類ひ罕なる。また何物
 にか是をよそへむ。

(業平朝臣集評釋畢)

業平の中將の家は。三條坊門より南、高倉より西に。高倉おもてに近くまで侍りき。柱なども常に似ず。ちまきばしらと云ふ物にて侍りけるを、いつ頃の人のしわざに。後に例の柱のやうに削りなしてなん侍りし。なげしもみな丸に。かどもなくついでなりて。まことに古代の所と見え侍りき。なごる晴明が封じたりけるとて。火にも焼けずして其ひさしさありけれど。世の末には甲斐なく。ひとせの火にやけにき。

〔無名抄〕

業平朝臣集拾遺評釋

題しらず

かすが野は今日はな焼きそわかくさの妻もこもれり
我もこもれり

此の歌は二條、后高子の未だ只人にておはしける時。業平朝臣忍びに伴ひ出で、春日の里に隠りけるを、高子の兄人なる。國經基經の二人して、取返しにもせしが、其折朝臣の詠めるよし大鏡に見ゆ。古今集には讀人知らずとて出でたり○春日野。大和國添上郡にあり。今日はな焼きそ。今日は焼く勿れとの意なり。春は種々の草をば能く生ひ出でさせむ爲に野をも山をも焼く事あれば也○若草の「は。枕詞なり。若草は愛らしき物なれば。夫婦の間

にて互に愛する意より、若草の如き妻といふ心に續くる也と眞淵翁は云へり。○妻も籠れり我も籠れりは、妻も我も、即ち夫婦諸共に野邊に遊び居る事を云ふ。こもると云ふは、茲にては人目を耻ぢて隠れ遊ぶ意なり。日本書記に幽居コモリノシマス、また萬葉集に足常母養子タラナチノヘノカガツラノ眉隠ヒヅメカクレ、隠在妹見依鴨カクレシメノイモメミヨシノカモなど、幽、隠等の文字を据ゑて、こもると訓じたるにて知るべし。

一首の意は、夫婦諸共に、また、春の野に出で、面白く楽しく遊び居るを、野火の爲に妨げられむ事を厭ひ、野守に對ひて今日は野を焼く勿れと依頼したるさまにて、取返しに来れる高子の兄人等の上によそへて諷はれしなるべし。一首かすが野は今日はな焼きそと、隙間なく歌ひ出でて、若草のと静かに是をやすめ、妻も隠れりと其儘腰の句に強く續けたるは、いと弛びなき調べと謂ふべく。はた若草のと云へる枕詞の、言ひ知らず春日野には

似つかひて、艶に麗はしく聞ゆるもめでたし。俊恵法師が歌語に、月と言はんとして久方と置き、山と言はんとして足曳と云ふは常の事なり。されど始めの五文字にてはさせる興もなし。腰の句に克く續けて、言葉のやすめに置きたるは、いみじく歌の品も出で來ふるまへかけすらひとなる也。古の人これをば「半臂句」とぞ云ひ侍りける。半臂は、させる要なき物なれど、装束の中に飾となる物なり。歌の三十一字いく程もなき中に、思ふ事を言ひ極めむには、空しき事をば一文字なりとも増すべくもあらねど、此の半臂の句は必ず品となりて姿を飾る物なり。姿に花麗極まりぬれば、おのづから又餘情となる。是を心得るを境に入るといふと云はれしは、此の春日野の歌の評とも見るべくや。さて此の歌、伊勢物語に初句を「武藏野は」となして、野を焼くも春の野火の事ならず。盗人を搜索せむとて野を焼く事とし、はた此の歌を女の詠める事

としたるは、例の作り物語にして事實にはあらず。

一八六

題知らず

しらたまか何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消な
ましものを

新古今集哀傷の巻に出でたり。もと此の歌は哀傷の歌にはあらざるを。伊勢物語に。むかし男、ある女を盗みとりて。芥川といふ川の邊に出でたるに。女、草の上に置き渡せる白露を見て。あれは何ぞと問ひけり。さて行く先もいと遠きに。雷鳴烈しく雨いたく降り。夜もいと更けにければ。鬼の栖家とも知らず。路傍の荒廢なる倉の奥に女を隠し籠めて。男は倉の戸口に立ちて。弓胡籙きりこを取持ちて守護しつゝありけるに。鬼は奥なる女をば早ひと口に喰ひぬ。その時女あなやと叫びけれど。雷鳴の烈しさに。男は

其聲をえ聞かざりしかば。何事も知らず夜を明して借うち見れば。伴ひ來し女はあざざりき。と様さまに作り倣して。あはれ斯かる憂目を見むと知りせば。彼の芥川の沓はらの草の上に置ける白露を見て。白玉か何ぞと女の問ひし時に。おれは露と云ふ物ぞと答へて。その白露の散ちふが如く。女と共に消ゆべかりし物を。甲斐なくも生き長らへて。此處まで辿り來し事の口惜しさよと。女の鬼に喰はれしを悼なげむさまに。歌の心をも更へられしをば。さながら哀傷の歌として新古今は採れるなるべし。さて此の歌は。前の『春日野は今日ばな焼きそ』と詠み給ひしと同と折の詠にて。即ち高子を伴ひて春日の里に隠れ遊びてありし時。高子を取返しに來れる其兄人たちの。朝臣をば見出で。其處に隠れるは誰ぞと咎めしをば。白玉か何ぞと人の問ひし時とは云へるなり。

一首の意は。其處に置けるは白玉か何ぞと人の問ひし時に。是

一八七